

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十六卷 第六号



6

日本幼稚園協会

〈新発売〉



なんだろう！
のぞいてみよう！
くぐってみよう！

キンダー

ファニートンネル

定価5,000円

直径60cm

全長3m

類似品にご注意ください

■このキンダー・ファニートンネルは、屋内、屋外、季節をとわず、どんなところでも楽しくあそべる新しい運動遊具です。幼児の、もぐる、はう、ごろごろころがる、などの本能を十分に満足させ、きまりを守る安全な体育あそびをとおして全身運動を活発にさせます。とくに足腰や腕の力をつよくし、勇気と忍耐力を養うのにも好適です。

■特長 ●本体はピアノ線と高級ビニールターポリンで特殊加工されていますから、たいへん丈夫です。冬でも硬化しません●アコーディオンのように伸縮自在です●重さはわずか4kg、軽量です●中央部分が透明ですから中が覗けます●簡単に何台も連結できます。

■あそびかた ●はってくぐりぬけましょう（手や足腰を丈夫にします）●しゃがんで歩きましょう（腹筋を強くします）●トンネルごとごろごろころがりましょう（平衡感覚を養います）●このほか、ボールを通したり、たくさん遊びをすることができます。

発売・株式会社 **フレール館**



幼児の教育 目次

——第六十六卷 六月号——

表紙 井口文秀

教育課程の基調

—幼児教育の基本問題—その四……………坂元彦太郎…(2)

幼稚園におけるのぞましい活動……………お茶の水女子大学附属幼稚園

たのしかった日日……………村田修子…(9)

三歳児のいろいろな活動……………関治子…(15)

幼児の創造性……………堀合文子…(22)

いろいろなあそび……………守永英子…(26)

リズムあそび……………村井トミ…(33)

卒業前の幼児の活動の実際……………富樫純子…(40)

幼児の健康をめぐる諸問題……………松本幸久…(45)

幼稚園四十年(六)……………菊池ふじの…(52)

☆座談会

幼児の活動の観察……………司会・津守真…(63)

教育課程の基調

— 幼児教育の基本問題 その四 —



坂元彦太郎

へ 1 へ

幼稚園の教育課程を論ずることは、つまり、幼稚園教育の興味や方法を問題にすることである。世間には、年間の教育計画を精密度表にして印刷したものをこの名でよぶ人たちがいるが、それは教育課程の印刷表に過ぎず、教育課程に関する問題には、もっと根本的なものがあるわけである。すなわち、教育課程というのは、幼稚園教育の興味や方法の全体を指していることばであるが、その一部を研究することも教育課程に関する研究ではある。実は、自分たちの園ではこういうふうに行っている、という実質が教育課程そのものであって、それを文章で書こうと、口でいおうと、頭の中に描くだけであろうと、意識しないで自分のからだと実施しようという、同じように教育課程なのである。単に、狭

い意味での計画にとどまるものではなく、やっている教育の実質そのものをいっているのである。むろん、その中には計画されたものも含んではいるが、一義的には教育活動の実質そのものであり、幼児の側からいえば、園でもつのぞましい活動の総和である。

ところで、わが国の制度では、いいわるいは別として、幼稚園教育要領が各幼稚園の教育課程の基準となることになっている。保育所についても、文部・厚生両省の局長の話し合いで、同年齢の子どもの保育については、大体幼稚園教育要領に準拠することとされ、のち保育指針がつくられているが、実質的には幼稚園教育要領と大きなちがいはない。

しかしながら、この昭和三十九年に告示された現行の幼稚園教

育要領は、幼児教育界にさまざまな影響を、いうなれば多くの功罪をもたらしている。功はしばらく置き、罪は結局はいくつかの誤解にもとづくものといふことができる。いろいろな先入主をもってこの文章を読みとるためにさまざまな混乱がおこっているといつてもいい。わけても、領域に関する記述が大きな震源になっている。

「健康、社会、自然、言語、音楽リズムおよび絵画製作の各領域に示す事項は、幼稚園教育の目標を達成するために、原則として幼稚園修了までに幼児に指導することがのぞましいねらいを示したものである。しかし、それは相互に密接な連関があり、幼児の具体的、総合的な経験や活動を通じて達成されるものである」

「第二章 内容」の冒頭にこのように明記してあるのであるが、この、領域で示してあることは、ねらいである、という点を無視してしまう人が少なくないのである。この点に関連して、教育の「内容」とこれらの「ねらい」との関係について述べることからはじめよう。

章の標題が「内容」となっているからには内容のことに關していることはいうまでもないが、実は、内容を直接に示しているのではなく、ねらいをあげることによって内容を示唆しているのである。たとえば「いろいろな歌を歌うことを楽しむ」というねらいがかかっているが、こういう曲のこういう歌詞、こういう標

の歌というような具体的な内容を示しているのではない。ただ、幼児たちが、その実状に應じて楽しんで歌えるようなものを選び、といっているだけに過ぎないのである。具体的な内容は、示唆を受けた各幼稚園なり、先生がえらび出したり、定めたりするのである。

このように具体的な内容を示していないことに不満をもつ人もあるが、実際の事情に應じて具体的に定めるのは現場の仕事だ、ということになっているのである。

いまひとつ、ねらいは、それを通じて内容を示唆しているものだといふことに加えて、よく見おとされているのは、それが「幼児の具体的、総合的な活動を通して達成される」ということの含んでいる意味である。幼児がいつもいとなんでいる活動は具体的に総合的なもので、いくつかのねらいがいっしょに達成するようになっているのである。ひとつひとつのねらいは、それから分析して抽出されたものなのである。いいかえれば、実際に目の前に存在するのは、幼児たちの実際の活動であり、教育課程をつくり上げている実際の単位は幼児の活動なのである。ねらいは、その中に含まれ、それを通じて達成されるもので、分析し抽象し出されるものである。むずかしくいえば、ねらいは論理的には活動に行するが、事実的には活動の方が先にあるのである。

以上のように考えてくると、領域に示してある事項のひとつを取りあげて、それを真正面から教えこもうとするようなことが、あやまっていることは自明である。それだけでは具体的な内容をもたなくて、いわば空虚であり、具体的な活動に含みこまれないれば、いわば抽象に過ぎないのである。ねらいだけで教育課程の中心問題が尽きると考えるのは、ごくその一部のことにのみにかかわっていることに気がつかないことだ、といってもいい。

また、このようなねらいのいろいろなものを組み合わせたり、領域ごとにねらいを具体化して寄せ集めれば、教育課程全体ができあがるように考えるのも、考えちがいである。これは、小学校などの教育課程編成に熟達している人が、その方法を幼稚園の場合に適用したようなときによくおこることである。教育課程は内容の組織と、その人は考えているのに対して、そこでは内容ではなくてねらいを中心としたものになっているのである。いいかえれば、「教科」と、園でいう「領域」との基本的なちがいをじゅうぶんに理解してほしいのである。

ところが、もっと一般的にゆきわたっている先入主があるようである。このように、幼稚園教育要領などに列挙してあるものは、これを何とかして教えこまねばならないものである、と考えるだけでなく、さらに、一斉に、そして同じように教えなければならぬものである、という考えが、いつの間にかやらいきわたっ

ている。教育が計画的だ、集団的な教育だ、とすれば、必然、一斉に、同じようにやらせる、ということになるのだ、という気持ちである。

むしろ、直接にねらいをひとつひとつ教えこむことができないことは前述のとおりであるが、具体的な活動を通して達成しようとするとしても、この「一斉に、同じように」という考え方には反省しなければならぬものがあることを指摘したのである。

根本的にいって、幼稚園や保育所は、ひとりひとりの幼児を、それぞれの実情に応じて育て伸ばしていくことがその立て前である。にもかかわらず、同じような成果を、すべての幼児に一律に実現しようとおせっている人たちが多く、そういう人たちが、「一斉に」幼児を取り扱い、「同じような」ことがらを、「同じような」程度で教えこまねばならぬ、と思ひこむのである。

さらに、たとえば、幼稚園教育要領にあげてあると、どうしてもそれをのこらず、意図的に教えこまねばならないのだ、としてしまうのである。しかしながら、こうしてあげてあるのは、それが価値のあるこのましいことであるからなのであって、必ずしも意図的にすべて教えこまねばならぬ、というのではない。むしろ、園の生活をしていると、知らず知らずのうちに身につくようなものが多いのであって、少なくとも、そのように環境や生活を

しくむことがぞましいところのものが多いのである。ときには、むしろ例外的に、はっきり教師が口に出して指示して教えこむこともあり、また、半ば意識的に子どもの活動をみちびいたりすることもあるが、直接に「指導」しなくてもしぜんに身につくようにもっていく、ことが、原則なのである。

まして、大切なことなら、必ず、一斉に、同じように教えこまねばならない、などということはない。ひとりひとりがその素質や、環境や年齢や発達の実情にに応じてそれぞれに伸びていけばいいので、同様な結果に、同じことを同じ程度に、達しなければならぬなどということはない。しかも、子どもたちがそれぞれに遊びなどをしている間に、それぞれに伸びていけばいいのであって、一つの場所にすべての幼児を集めて同時に教えこむ、という方法をとるのが原則だ、などということはない。実は、学校教室授業のまねをすることが、ふかく園のやり方にしみこんでいるのであるが、ふだんの、人には見られていないときには、幼児にもっとひとりひとりの活動をさせているのに、人に見られるときには、教師が前に出て幼児を引っ張っているところを見せなければいけない、と体裁をつくらっているのではあるまいか。そのような見栄を張らせる空氣に、問題があると私は考えている。

しかし、そういう空氣をつくるもとに、幼稚園教育要領や保育指針などがなっていることは、全く皮肉であり、残念なことであ

る。たとえば、双方ともに、至るところに、「指導」という文字が出てきて、鼻につくくらいである。あらゆる場合に、幼児をより高いところに導くことは、全部、「指導」ということばで現わしてある。かつては、保育とか、教育とかいうことばを使っていたことを、指導といっている。保育や教育は、園でのそれらの全体をひっくりかえしていうときに使い、その個々の場合を指導といっているのである。

ところが、「指導」ということばは、小学校などでは、学級で一斉に、教師がまともから教えこんだり、説明したりしていくことというようになってしまっている。私は、この場合でも、こんなに偏狭に使うことはまちがっていると思うのであるが、その解釈をそのまま幼児教育に持ちこんでくる強引さには呆れるのである。すなわち、指導というのは、何か教育的な意義のあることをある程度でも達成させたら、そういつていいので、しらすしらすに子どもにさとらすでも、ときには一斉に指示するのでも、それらを全部そのようにいつているのである。とはいえ、いたるところに指導の文字が出ると、いたずらに教師の「指導意識」をおりたてることになって、おかしな空氣をつくりだすことになってしまふ。ひとから見られるときには、教師が前面に出て指導しなくてははずかしい、といったことになるのである。こういう迷妄は、何としてでも打ちはらうようにしなければならない。

いい尽されていることなので、ごくかんたんに書くことにするが、いわゆる自由遊びが園の生活の主要な部分を占めるのが、しぜんであるといいたい。自由遊びという、遊びの特定な種類があるわけでなく、遊びのどんな種類のもでも、子どもが自分で選んでするのをいうわけであるから、分量からいってもこのようなものが園の生活の主な活動になるのはいうまでもない。といって、活動の種類によっては、教師が一斉に直接に指導するものがあるのも当然であって、よく問題にされる「自由」か「一斉」かは、どちらが価値が高いかとの問題ではない。そうある方がのぞましいときに、そうあることがいいことなので、そうでないときは、よりのぞましくないか、次善かであるわけである。しかし、いずれにしても、幼児が自分で進んで遊びをするという態度が常に尊重されねばならぬことはいうまでもなからう。

へ 3 へ

次に、ねらいと、幼児が達している発達の段階との関係について考えてみたい。

世には、幼稚園教育要領にかかげてあるようなねらいを、そのまま幼児たちが実現可能になっている、と思いきこんでいる人たちがいるようである。すなわち、ねらいと、現実の能力とを混同している人たちなのであるが、この両者の関係はまことに微妙なものがある、このようにかんたんに定めることはできない。

第一に、このようなねらいは、抽象的な言語で表現されているから、どうしても高度の概念的な表現になってしまうのである。

ちょうど、幼児にふさわしい程度にいい表わすことは、とても困難なことである。文字通りに解すれば、多くのねらいは幼児の現段階よりはずっと高過ぎるものである。しかし、これはやむをえないことであるので、幼児にふさわしいように、適度に低めてねらうようにするより外はないのである。すなわち、幼児にまでひきおろされた具体的なものに、ここにあげられたねらいを解しなおすことになるであろう。

とはいえ、もともと、ねらいは現実の姿よりは一步二歩高いものをたてるものである。だから、ねらいをどのように解するにせよ、必ずしも、現在の段階と同じレベルではなく、意識的に一段高いものにするのは普通のことである。

他方、幼児の発達は、いわゆる生物的な成長発達と、複雑な文化環境からの影響とがからみあっておこなわれるものである。こうした原因や理由をたずねることはいまはやめることにするが、とにかく、幼児にはそれぞれ、いろいろなことができるようになっていく。いわゆるレディネスがいろいろなことについてできてくる。

この場合でも、強いて区別すれば、いまのままでそのまま伸びればつぎの段階にのぼりうるようなのと、ある適切な文化的な環

境（いいかえれば幼児がのぞましい活動をしたり、教師の助言や、指導が加えられることなど）の中に置かれればそうなるものがあるであろう。しかし、いずれにしても、ねらいに対して、すぐ手近なところまで発達してきているような部面でなければ、駄目だ、ということである。いま一步で、何かのぞましい活動をさせれば、そこに到達できる、といったような関係に、ねらいと現在の発達段階とがあることが必要だ、ということである。

ところで、幼児には、この域に達したような部面がたくさんあるのである。文字や数だけでなく、子どもたちにやらせればできるようにになっている部面は無数にあるのである。世間では、文字や数に関してだけ神経質に主張する人があるが、むろん、やらせれば幼児でもある程度までやれるようになっているのである。しかし、私にいわせると、やれるようになってい、価値のあるものももっとたくさんあるのであって、そのうちのどれとどれとに重点を置くかを、改めて考えて見なければならぬのである。この際、特に、幼児のときに経験させたり、伸ばしておいた方がいような面を重視することがたいせつであろう。

とすると、端的にいえば、幼児のときには、できるだけ、幼児らしいエネルギーを発揮させて、幼児期にじゅうぶんもたしてやりたい活動をやらせることを心がけたい。文字や数をとりあげて「一斉に」学校的な方法で指導するようなことに、労力と時間を

費やさせるよりも、もっと普通の幼児的な活動をふんだんにやらせるように心がけることがのぞましいと考える。数や文字を、幼児が普通の生活の中でしぜんに経験することはむしろのぞましいことであるが、特にこれらを引出して重視するような人たちは、そこにとどまることをせず、他の種の活動をうちの低いものと考えて抑えるようにまでなってしまうのが、あやまっているのである。

へ 4 へ

ところで、幼児たちへのぞましい活動をいとまませて何かのねらいを達成させようとしているとき、世には、ひじょうに近視眼的に考える人たちが多いのである。

はつきり指導の計画をたてて、あるねらいを達成させようとするとき、そのねらいが直ちに到達されねばならない、と考えるのである。それで、学級のうちの多くがその域に達しなかったり、ふじゅうぶんであったりすると、指導が失敗だった、と見るのである。ちょうど、小学校で漢字を教えて、そのあとでそれが書けなかったことが、指導なり学習なりの不成功である、とするのと似たようなことを、幼児の場合にも持ちこんでくるのである。

しかし、少なくとも幼児の場合は、そのように近視眼的に判断してしまふべきではない。指導の直後の現在で、そのことが達成されていなくても、それで直ちに指導の失敗と断すべきではない

い。現在どうあるということよりも、将来どの方向に向かっていくか、ということが問題なのである。たとえば、組全体でそろってある仕事ができるようになるのがぞましいが、現在、そうできるかどうか、というよりも、時がきてそうなれるようであればいいことが多いのである。いまはできなくても、しだいにできる者が多くなり、年長児や卒業の頃までにみんながそういうふうになれば、それでいいのである。

別のいい方をすれば、現在失敗したり、横道にそれたり、未熟であったりすることは、あってもかまわない。それでいて将来いつのときか幼児なりに成就されるならそれでいいのであり、さらに、失敗したり横道にそれたりしていることが、いつかは成功をもたらしことになればそれでいいのである。幼児の保育にあたっては、このような気長さ、しんぼうづよさがあってしかるべきなのである。

たとえば、ある先生が実際に保育に当たっている一時間なり、一日なりをみて、それでその保育の仕方のおしあしをいうのは、まことにおろかなことなのである。現在の時点においてこうあるという断面をただしく見とったとしても、いちばんたいせつなことは、その保育がどっちの方向に向かい、いつかはどのように結果するであろうか、である。それを見抜くことは、たいせつなやさしさではないが、じっくりと、子どもたちの活動ぶりの奥を

見ていけば、ある程度見当がつくこともあるであろう。それには、そこまでにいたったその教師と子どもたちとの愛情的な、つながり、展開されてきた活動などの、過去の基盤とともに、さらに現在がダイナミックにそれが動いていく将来の姿とを一体的に把あくすることができるようでありたいものである。

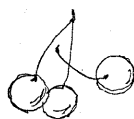
ということをしるにいいかえれば、ねらいとそれを含む幼児の活動とを、現在の時点における平面的な断面としてとらえずに、動的な立体的な連続的なものとみなしてとらえるようでありたいのである。ねらいを論理的に先行させるにしても、活動を事実的に優位とするにしても、それを別々に分離したものと考えないで、動いている有機的な生命体そのものの動きとみていきたいのである。実は、そうした、過去を含み、将来をはらんだ生活のつながりを、活動となづけていいのではないかと思うのである。

幼児の教育を計画的に行なうために、教育課程を編成するには、ねらいをはっきりさせ、その組織をつくる必要があるが、そうしたねらいを、具体的、総合的な活動そのものから遊離したものとして考えるのは、幼児の教育の実相から離れてしまうことになる。生きているがままの、動く方向をも含むこんだ幼児の活動をきながらにとらえることが、真の意味で、幼児の教育を計画的なものとし、生きた教育課程を編成することになることを忘れてはならない。

幼稚園におけるのぞましい活動

お茶の水女子大学附属幼稚園

たのしかった日々



村田修子

子どもを幼稚園などに入れるということは、今までいつも一緒にすごしていた親と子にとって、生活の流れの一大変化です。

人生ではじめての経験であるこのときの親子の心持ちは、これから先に体験するさまざまなことがらのどれと比べてみても劣らないほどの重みを持ったことだと思えます。ですから、親は子どもに「こんど幼稚園に行くのだから、ちゃんとするのよ」とか「おりこうにしましょうね」と何事につけても、つい口から出てしまうのでしよう。

特に三歳児の場合など、まるで親の方が入園したような状態で、

先生が子どもに話しかけているのに、そばから親の方がかわって返事をしてしまったり、なかなか子どものそばから離れにくいようすを示すことがたびたびあります。こういう時期でも、大体の子どもたちは親の心配をよそに、水にはなたれた魚のようにのびのびと活動し、また「おりこうにできる」と一応の返事をしたひとと適当にいたずらをしたり、自分勝手なことをいったりします。この乳児っぽさのぬけない、ぼちゃぼちゃした新鮮な顔つきや、くりくりとしたあどけない目もとを見ていると、まず第一に、つぎのようなことを考えます。

このひとたちには、ひとりひとりを充分に出させて、家にいるのと同じようにわがままもよい、気持ちのよいときには即興のうたの一つも出るようなふんいきを作るようにして、私もその中に入ってもに笑い、喜び、ときには本気になって文句もいい、しかもその文句をいわれたことが、母親のそのときと同じように、いつまでもあとに残らない、きっとしたひびきであるようなすこしかたをしたいとも思っています。

そこにお互い同士信頼感が生まれ、そうやってはじめてこちらの計画にのせられるようになってくるのです。

○入園当初の日

入園したての子どもを迎えた教師は、子どもを覚え、手は、まわりについてくる子どもの手をひき、まごまごとしてつつ立っている子どもに言葉をかけ、目は、自由奔放に園の中を走りまわって、おそれるようすもなく次々と珍しいものにふれてあるく子どもの姿を追い、同時に集団生活の中で守らなければならない最低限の事柄を何度となく繰り返し繰り返し手をとって教えるという状態です。

こういった、おわれおわれている時期について、どうしたらよいだろうか、という問があったとしたら、私は何年経験しても「こうするのが一番よい」という答をすることはできません。ただ、こういう忙しい神経のつかれる一日一日があつてこそ、先生と子どもの間にほんの少しずつでもふれあいができてきて、ちょうど親と子どもとの間にあるのと同じような人間味や愛を感じてきて、そこではじめてだんだん自分を開いてみせてくれるのだと思います。ですからどんなに忙しくて手がまわらないようなときでも、ひとりひとりにほほえみかけ、目で話をし、すれ違いのときにも声をかけたり名前を呼びかけてやったり、いわれたことには必ず返事をし、知っている歌も一緒にうたい、手をつなぎ、ときには膝にのせてあげるような平凡なすごしかたが大切でしかも尊いのだと思います。

そしてこれがのぞましい活動をするようになるもてができていく

毎日なのです。

○六月頃のある一日

六月も半ば頃になると、生活が一応軌道にのつてくるので、ひとりひとりのすごしかたがゆつたりとして、安定感ができてきます。

それぞれが自分のすきなことをして遊んでいても、その内容は入園したての頃とちがって、気あう人たちが集まって遊んだり、またそのとき何かをきっかけにして偶然関係ができた二、三人の友だちが集まって遊

自分たちで作ったおさかなつり



ぶようなときもみられます。

「たまたま、中型の積木を長く並べていたとき、その並んだ積木の先がへやのすみにあった売りやさんごっここの台のところまできてしまい、その一つをその台の上のせたことから、「ここはアイスクリームだよ」といい出して、長い紙を探してきたひとりが私に「アイスクリームや」と書かせて、それを台にはりつけると、他の人がまた紙をもってきて「いまはおやすみです」と書けとか、「もうじきうります」などいろいろの看板をかかせて、台にところかまわずはりつけました。

そういうようすをうらやましそうに見ていた三人が「いれて」と加わり、おみせにはいりきれないひとは、積木をかかえたり、なれない手で包み紙に包んだりして、呼声をたてて売りあるきました。

そういった遊びの経験のない人や、積極的に「入れて」といえない人たちは、自分たちの遊びをやめて、盛り上がったふんいきの「アイスクリームやさん」のようすを見ていただけです。

三歳児は大変に個人差が多いので、こういうような場合、遊びに入りこんでいる人たちは興にのって楽しくて仕方がないので、ほかのことをしているひとの誰かれかまわず浮き浮きした気持ちで接して、ほかのひとの遊びをこわしたり強引に自分の遊びをおしつけたりすることがあるので、相手によっては「あの人はこわい」とか「乱暴だ」という印象を与えてしまうこともあって、それがあとま

自家製たいこ、バイオリンなどの楽隊のあそび



で尾をひいて困るようなこともあります。

この遊びに入れない人たちからは、驚きとか、うらやましい、という気持ちを感じられましたので、ちょうどよい時期をみはからって、「おもしろいおみせができたわね」「みんなで買いにいきましょう」「ああ、そうそう、おかねを持っていかないと売ってくれないかもしれないから、あの電話で聞いてみてちょうだい」と声をかけてままごとのコーナーにいるひとに電話をかけてもらったり、値段をきいたりなどして、おみせとままごと遊びのところのひとに關連をつけたり、それにも入れないひとたちをきそって一緒におかね作りをはじめました。そこでは、おかねの形や、色や、みたことのある

なしなどの話をしながら作ったり、入れ物がなくなってしまうことをいい出したひとのことばをとりあげて、おかね入れを作ったりすると、思わぬときに全員が製作に参加し、それぞれが知っている知識を出しあって、結構いろいろな形のものでき上がっていきます。

おみせやさんだったひと、友だちが、自分のおかねや入れものを作っているのがうらやましくなってきた、これに参加してきたり、早くできたひとがおみせやさんに早変わりしたり、おかねを知らない人が「本当にこれがかえるの」と目を輝かせたり、その入れものを大事そうに一日手から離さなかったり、という姿をみると、その新鮮さに涙が出てきそうになります。

教師側がたくらまないでも、このようにみちみちた、豊かな流れの一日もあります。

子どもの側から遊びが出てきて、それが更に発展してきたときに、「おもしろいおみせができたわね、おかねを……」と言い出す時期が適当でないと、せっかくの遊びがよりよく発展しないで、ただ追いかけたり、逃げまわったりということになり、終わりにはびっくりかえるような騒ぎになってしまいます。ですから、そのチャンスのつかみかた次第。という場合が非常に多いように思います。

いうならば、こういう一日は、「のぞましい活動をした一日」ということになるでしょう。けれども、いつもこのようにうまくこと

が運ぶとは限りません。振り返ってみると、のぞましくない、というより、何か得るところがあったかしら、と考えてしまう一日もたくさんあります。

また、いままであげてきた例のように、一つの遊びを発展させるようにつとめるのですが、それが思わぬ方向、おとなからみると好ましくない方向にいつてしまうことがあります。そういう場合は全員の気をそらさなくてはなりません。今日は何をして……という計画があったとしても、それはさておいて「今日は学校のグラウンドの方に遠足にいきましょう」とか「兎が新しいごちそうをくわっているから、山の上の方へとりにいきましょう」などといって、先生がはつきりした態度で気分を転換させなければ、今までの遊びを忘れさせることはできません。こういうとき、ほかの遊びをたくさん知っていること、とっさにくふうすることができるとは大変強味です。

○二期のある日

へやの中で遊ぶことが多く、さそってもなかなか庭に出ようとなないことが気になっていたので、みんなをさそって園の外を歩いて帰ってきてから「おもしろいことをしましょう」といって「あぶくたつた」の遊びをしました。もちろん、この歌や遊びを知っているひとはほとんどなかったのですが、言葉のやりとりのおもしろさ、

七匹のこやぎごっこ 1 (かわいい狼の訪問)



七匹のこやぎごっこ 2 (たべられないうちに逃げましょう)



ているうちに、それが「七匹のこやぎ」の店に似ているところから、七匹のこやぎごっこになってしまって、おとなはいつも狼にされました。そして毎日あきずに繰り返し返されました。

鬼あそびになるスリルがあるので逃げて逃げてとうとう遊戯室の前一段高くなったところを自分たちの家のみたてて逃げこみました。そこにはいって、みえないかぎをかけて鬼である私をその中に入れないようにしたり、男の子は指で鉄砲を作り私をうつまねをしたり、またそこからちょっと出てからかかってみては逃げこんだりし

で勝手なことをすきなようにしてへやの中ではかり遊んでいました。が、この遊びを経験してから、「あぶくたつたしょうよ」と言いそくしたり、「ぼくは外で遊んでくるよ」とすんでいうようになりました。今まで全然知らなかった世界の扉を開いて、経験の幅が広がってきて、いまはおもしろくて仕方がないというようすです。

この遊びのときは、組全体が一つになって遊ぶよい機会で、このときから庭へ出て遊ぶことが多くなりました。一人っ子のYちゃんなどはいつもひとり



これから考えても、いろいろの体験をさせてあげることの大切さをつくづく感じます。

三学期にはおとながはいらないでも、自分たちでまとまって遊べるようになりました。

その特徴として、自分たちで作ったものを使って遊んだことです。組木や、紙をまるめて作ったピストル、紙をまるめて胴体を作りはねをつけたひこうき、紙の箱に車をつけて引張れるようにした箱車、犬などいろいろのおめん、おめんのわくにストローを二本つのようにつけてマグマタイシごっこのおめんにしたり、年長組が劇のときにした蝶のはねを同じように作って背中につけてとびまわるなど……。

思い返してみるといろいろな遊びがくりひろげられました。が、「何を指導した」というよりは、一緒によく遊んだことと、自分たちだけで遊べるようにするために、何かと理由をつけてはその中からぬけ出すくふうをしたことが一ばん印象に残っています。

ただうまくいかなかったことは、男の子と女の子がはっきりと分かれてグループを作ってしまうことです。お互いの交流をいろいろ試みたのですが話題・使うことばの種類・遊びの傾向が全然違うところが原因の一つだと思いますが、このことだけが、のぞましくない傾向です。そして今日新しく入園してくる人とまぎって人数が多くなったときにどうなっていくかが問題として残っています。

三歳児のいろいろな活動



関 治 子

実際に経験した三歳児について、どんな活動があったか、おもい起こしてみたいと思う。その中から、のぞましいものを想像し、のぞましい活動のあり方をつくり上げていただけたらと考えている。

三歳児を受け持つに当たって、第一に家庭からはじめて社会に出る幼児を、家庭の延長のような気持ちで毎日過ごせるようにしたいと思った。また、発達段階からいっても、自己中心的な個々の生活から周囲を意識していく大切な時期でもあるので、幼稚園という場において、こういう発達のな推移を、教師としては何とかこわさずに、幼児を十分、活動させて成長させたいと思った。

幼児から出てくる活動と、教師がこうあってほしいと思う活動をかみ合わせて、よりよい幼児の成長をねがうわけであるが、何としても、教師の占める位置はむずかしい。

特に三歳児の場合は、教師の姿が、幼稚園における母親や身内の人立場になることが必要だと思う。そういう人間関係ができていけば、当然身につけるべき習慣などはきちんとなつけられ、のびのびと活動する場面は、十分に自分を発揮することもでき易いと思う。

一年間を通して、いろいろな活動のあらわれた基である友だち関係をみると、発達段階をおっているとはいえ、一年間の成長は、大きなものがあると痛感させられた。

一学期の間に、個個のあそびから、友だち関係に目ざめてきた。そのあらわれとして、仲よくもなるが、けんかがあらわれたり、友だちと一しよに、ただただ遊具を移動してあそぶことだけを楽しんでいたりした。概して、あそびは長つづきしない。

二学期には、だんだんに、協力することを知って、グループができてくる。二人位ずつのあそびが、適当に合流する。いろいろな遊具を、目的をもって使うようになってくる。

三学期には、かなりグループ意識が出てきて、役割をもったごっこあそびがみられ、かなり大勢の人数であそぶことも、できるようになってきた。一方、なかなか友だちになじめない幼児も、友だちができてくる。

次に、具体的な活動をいくつか、かいてみたい。これは、自由あそびの場において、あるいは、製作活動の場において、あるいは、その他のいろいろな場において出てきたものである。しかも、一つ

の系統的な○○ごっこというようなものでもない。積木あそびの中に、他のごっこあそびが合流したり、時には、教師の発案で発展したりというように、実にいろいろな要素を含んでいる。とても、分類して、整然となどかけない。幼児の生活というものが、こういうもの、つまり、混然として総合的で、未分化であるというのが、特徴だと思ふのである。

○パーベキューごっこ

ままごとのグループで、一人の男児が、「パーベキューをしましゅう」といい出したのがきっかけで、ままごとのグループと積木やレールあそびのグループが合流してあそんだことがある。積木や、組木、ヘアブロックを組み合わせて、それらしい材料をつくっては、運んでくる。ままごとグループはお皿を運び出す。今まで、ただ遊具を移動するばかりだったあそびに、同じ遊具を移動するのにも、パーベキューの材料をつくってくるという目的が加わった。それによって、やくどころもつくらなくてはというので、積木が総動員されて、大きなコンロができた。

「まだこれは、やけていませんよ」

「そうですか。よくやけたら三本、おいしいのを下さいな」

「おおあつ。おいしいですね。お皿をおくのに、お机を並べて下さいな」

教師が中にはいってあそんで、実際を通しての会話から、あそび

のひろがりど、友だちの結びつきが出てくるような気がした。時間としては、そんなに長くはないが、このような形式が、時期をちがえると次のような形であらわれた。

○もちつき

お正月近くになると、もちつきあそびがみられた。ヘアブロックで、いろいろな形を楽しんでいた幼児が「ベッタタンコ」といいながら、きねをつくった。教師もまねをして、きねをくふうしてつくって「ベッタタンコ」と、おもちをついた。

もちつき 大きな臼にたくさんおもちがつけた



「じょうずにつけますね。たくさんつけましたか」

「待って下さい、今できますから」

といいながら、周囲をぐるりとベアブロックでつないで、白をつくり、中にばらばらにしたベアブロックをたくさん入れた。

「つきたてのおもちをいただきますよ」

「やわらかいですね」「ああおいしい」

こんな刺激のことばで、三々五々集まってきた。もちつきを實際知らない幼児でも、簡単に参加して、雰囲気の中にはいりこんでしまった。はいつてこない幼児も、自分のあそびをつづけながら、こちらをときどき眺めている。

こういうあそびの時、教師の発案が、刺激となってよりよく発展していくこともあるがとすると、余り結果だけを考えて、教師の自己満足で、ひっぱってってしまうことも恐ろしい。かといって、放任してしまうことも恐ろしい。教師が、型を示さずに、幼児の考えを通して、幼児が活動していくように、それを育てるのが、よい教師なのだろうと思いをはせる。

○電車ごっこ

輪が、一台の車となってあそんだり、室内の一隅で椅子を並べて電車にしてあそぶことがあった。こんな時、まだ個別のあそびの方が多い時期でもあったので、教師が「のせて下さい」と話しかけて、教師や友だちの結びつきを計ったことだった。タクシーのつも

国際救助隊 サンダーバード2号がで上がった



りの幼児は「百円です」教師は、あわてて「ハイ、これでいいですか」ときれいな小石や葉を拾って、急場のお金にする。

幼児は、この小石一つ、葉一枚でも嬉しくて、顔をほころばせる。こんな所から、切符

や、かばんをつくり、電車ごっこをするようになる。というより、切符きりごっこといった方が、似つかわしい。切符きりの缺は、五つ位用意したものを交代に使った。この交代に使うことが、三歳児にとっては、非常にむずかしいことだった。適当な時間だけ自分の所有になることが、この年齢の幼児には、理解はできても、実行で



きない。ブランコの順番を待つことができても、所有欲はまたちがうらしい。思いがけない幼児が、いつまでも自分の引き出しにしまい込んでしまったりした。発達のみにみて、まだ早かったのかも知れないが、約束をして交代に使うこと、これも教師の命令として受け入れるのでなく、自分からやれるようになっていった。

三歳児の電車ごっこの場合、制約を多くしてしまって、あそびを複雑にむずかしくしてしまうより、補助材料などを教師がくふうしてやって、いつでも自分であそびたい時に、そのものになりきって楽しんであそべる方がよいのであろう。部屋の中に二か所ほど、バスにあるような切符入れの箱をつるしておいた。

「どちらまでいらっしゃいますか」

ちょっと並んで何人が腰かけると、カバンと切符を出してきて、切符をきってくれる。その時、即座に「大塚」「池袋」などと駅名をいうとご満足。全く、はじめは友だちにとけこめなかったのに、彼女にとっては、隅っこがくしゃくしゃになっても、ピンク、黄、水色と色の紙が束ねてあるその切符が、何よりも大切で、そして安定感も優越感ももてる大切な玩具——いえ、宝物であるらしい。

○国際救助隊

テレビの影響の強い例である。それまで、ベアブロックで、ピストルをつくったり、積木で、サンダーバード二号などいいながらつくったりして、ばらばらのあそびはあったのだが、それを何人かがグループとなって、まとまった目的をもってあそぶようになったのが十二月頃のことである。そして、三学期はこれに終始したというよい位であった。

ある日、ままごとの台所の前にすわりこんでいろいろな遊具を流しに一ぱいにし、ブロックでできたマイクを口元に、一生懸命語りかけていた。その後、テレビをみた私はびっくりしてしまった。国際救助隊の連絡員として人里離れた農家の台所が、秘密の通信場所になっていて、ボタンの操作一つで、素晴らしい通信場所になるというのであった。

毎日毎日、このあそびはつづくのだが、これがだんだんに変化し



ている。幼児のことであるから、あるグループは常に、これが基になっていくが、そこから、他のあそびや他のグループに、国際救助隊という名において、合流していく。

例えば、ままごとのグループで、全員が兎になってあそんでいたことがある。その兎が一匹にげ出したので、おかあさん兎になった幼児が、方に電話をしたり、尋ねて歩いている。「国際救助隊に探してもらいましょうか」ということで、ひとしきりあそんだことがあった。それから、兎のお面をつくったが、中には、耳だけをつけたり、顔からかいたり、それぞれ考えでお面ができると、それを頭につけた幼児は、兎になり切ったつもりなのであろう、始終とびはねて歩いていた。このお面をつくらなかった幼児が、二つも三つも作った幼児にかしてもらって、にこにこしてかぶってあそぶという、うるわしいひとこまがあった。私は胸あたたまる気持ちでみていたのだが、全く製作活動のないこの幼児が「こんどつくる？」という問いに、にっこりして、大きくうなづいた。つくりなさいといわれるよりは、自分があそぶために、何かつくりたいという自発性を待つこと、あせっては、かえって逆効果になることもある。

この国際救助隊が、ある日、プールあそびをしているグループと合流した。プールあそびのグループは、大きなこいを作っていたので、部屋の大半を占めてしまった。救助隊の基地はすっかり狭くなってしまった。はじめの頃なら、お互いにゆずれなかったであろう。しかし、三学期のこと、そのプールを、利用してあそび始め、

かわるがわるとびこんだりしていた。そのうちに、私もとびこんだりしたところ、「わにがくるからあぶないですよ。今、たすけにいきますから」と、またもや、救助隊本来の姿にもどった。わには、組木でくふうしたものを、何人かで、せつせとつくり始めた。プールのかこいが切れると、「工事の人をよんできましょう」ということで、また、他の幼児に役割を持たせ、くふうしてもらおう。また、救助隊の腕章を紙でつくって「字をかいてちょうだい」といってくる。素材をくふうして、実際つかえる遊具にしようとする気持ち、これが培われてくれれば、本当に嬉しい。教師は、常に共にグループの一員として、あそんでいることはできない。幼児だけの結びつきをそつとまわりから見守っていた方がよいこともある。一員として夢中になってあそぶことが必要なこともある。二本指の敬礼を教えてもらった一日は、温厚な上官のようなすの幼児が見守ってくれた。このように、かいてくると、教師の存在が、無に近いようだが、この中に、いけないこと、危険なこと、人に迷惑をかけることなどは、はっきり教えて、考えられるような幼児にしなくてはいけない。結局、精神的な交流、気持ちのつながりが、幼児との間に持てるようになることが大切だと思ふのである。

○おかし入れつくり

一年間を通して、毎月のお誕生会に、おかしをいただくいれものをつくった。はじめての時は、年長組からのプレゼント、これ

音楽リズムことりになって



で、恐らく、生まれてはじめての手づくりの味を知ったと思う。もちろん、三歳児のことであるから、これはよくかけず、缺も、まだ使えない幼児が、たくさんいる。そこで、はじめは、紙を丸めて形づくる経験からはいつてみた。

た。セロテープも扱えない幼児には、幼児におさえさせて、テープをはってあげたり、個人差に応じてやっていった。おかしがおちると困るわねということで、円錐を知り、円筒なら、何とか底をくふうしなくてはならないことを知る。底は折りまげて簡単にはりつけてしまったり、しぼって、まとめたり、必要から、いろいろくふうする。底だけ別の紙をつける方がよいと気づくが、伴わない技術

は、手助けする。左右均等になど切れなくとも、こうして、自分でつくり上げた自信と満足感で、次の時には、だんだんに、気持ちの抵抗がなく、とりかかるといっていい。

大きく二つ折りのバッグ型をやってみた幼児には、みんなに見せて、円錐や円筒だけでないことも知らせる。まちをつけることなどは、たくさんはいるようにしましょうということ、ヒントを与えてあげる。

また、ある月には、箱型、ある時は、周囲に缺でぎざぎざのきざみを入れて、これがかざりになるように、時には、のりを使ってつける、というように、教師としては、幼児から出てきたものをほめたり認めたり、教師は、助言、刺激を与えて、幼児からの自発的な活動を促して、一年間に、みんなが、楽しみながらつくる姿をみるようになった。

四歳、五歳の組では、怪物になっていたり、家になっていたり、大人ができないような、幼児から考え出したと思うおもしろいものができている。

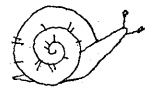
三歳児も、三月ともなると、きれいな模様で、うめたり、周囲をこまかくきざみを入れたり、持つ柄を、三角にぎざぎざに切つてきたり、二重に折つた柄、二本にわたした柄など、こんなところにも、くふうして一生懸命つくり上げていた。はじめには、細くて短かすぎて切れてしまつて、次には、頑丈なのをつくつてくる、試行錯誤も、貴重な経験であつた。

○音楽リズム

三歳児の自由表現は、先入感のない尊いのがみられる。金魚になつた幼児は、自分自身、全身で金魚になつたので、床の上に腹這いになって口をばくばくして、もがくように動こうとしている。小鳥になると、何とか、小さい身体になろうとして、身体をちぢめる。前にもかいたが、兎になると、ちよつとも人間の姿になつてはいけないように、はねることばかり、こうして、特に三歳児の場合、そのものと自分を同一視して、すつかり、同化してしまうようなので、音楽リズムの面でも、雰囲気からはいってあげれば、そのものになりきつて、楽しく十分にあそべると感じる。例えば、王子さまとお姫さまになる場合、きれいな長いスカートをあげましょうといわれただけで、ちよつとすまして、ちよつと恥ずかしそうにお姫さまになってしまう。王子さまは馬にのつて、短い刀をもつて……などと話すと、ちよつと貴公子のつもりになつて、親切に、お姫さまとダンスもできる。教師は、雰囲気づくりと、教材を、よく幼児の生活をみて、とり入れていかななくてはならない。

こうして、ふり返つてみると、幼児は、何と何と色々な可能性をもっているのだらうと、つくづく思う。それを阻止することなく、いろいろな可能性をひきのばす基を育てていきたい。幼児にとつては、それが、何より楽しい活動の場となるように、とねがついてゐる。

幼児の創造性



堀合 文子

ものを考えてつくるということは、人の一生に大切なことで、社会の第一歩である幼児期に創造性を培っておくことは、そのひと個人にも、社会人としても大事なことでしよう。

創造性を培う経験

幼児期にはもちろん、創造性を養うことは無理でしようが、本来の創造性というものは個人個人みな異なった状態でその人の中に存在しています。現に、幼稚園という場へくると、個人個人創造性を発揮してあそびの生活を営んでいます。幼児が自発的に生活する時こそ、それは盛んで私共はその活動をきまげないよう環境をととのえ、充分に発揮できるようにし、そして後に刺激を与えたり、材料を提供したり、助言をしたりしてそれをより伸長させるように努力しています。

四月入園してきた時は、その創造性は、首ももたげないように奥にしまわれていた幼児も、幼稚園生活によって一年後、二年後、三年後には、目をみはるような創造性が発揮できるのです。

幼児の生活は、一つ一つが創造なので、手を洗うことから、積木その他のおもちゃであそんだり、紙に絵を画いたり、物をつくったり、音楽にあわせて体を動かししたり、また砂場であそんだり、みんなみな、そこには小さい小さいが創造性を働かせて生活をしているのです。

模倣から出発したものの、経験から出発したものの、とそれはいろいろあるでしょう。しかしよくよく観察してみるとそこにはすばらしい創造があり、刻々と創造性が培われているのです。換言すれば、幼児の生活は、経験と創造の連続繰り返しともいえるでしょう。絵をかかせたり、物をつくらせたり、音楽にあわせて体を動かしたり、これももちろん創造性を培うよき経験であることはいままでありませんが、積木でいろいろ積んでつくる。砂場でどろんこあそびをしたり、おだんごづくりをしたりするのも、またウルトラマンごっこをしてあそぶのも大切な創造性を培う場として私どもはおろそかにしてはならないことです。

幼児の創造の生活

例(一)(四歳五月下旬)「いつものようにブロックで、ジェット機、飛行機、○○型、宇宙船などごつくり、部屋の一隅でつくったり、でき上がると次は部屋の中を爆音すさまじく飛ばしてあそんで



いた。そのうち「先生紙ちようだい」と紙をとりてきた。飛行機をつくるとのこと。そのうちに紙の飛行機が数台できていた。他のこ

とにかまけて数分後に彼らをみにいくと今までのプロック製の飛行機も紙製の飛行機も影も形もなくて、そこには積木でつくられた格納庫と飛行場ができていた。だまって観察していると、格納庫の扉が開きプロック製のジ

ェット機が発射していった。格納庫の中には数台の飛行機が紙飛行機と共に整頓して並んでいた。」

例(一) (四歳七月頃) 「あいかわらず、砂場あそびは盛んで、おだんごづくり、山づくり、ごちそうづくりから最近はダムのようなものをつくり、水を流してはあそんでいる。積木戸棚の片隅に古くなつたふるいがあまり今までは使われないうつまっていたが今日は実によく有効に使われている。砂をやや積みあげたところにふるいをはさむようにおき、そこへ水を流す、また川のようなところへもそのふるいをはさみ水を流すたびにそのふるいを通して流れる。」

例(二) (三歳後期より連続四歳現在) 「三歳の頃はかたいおだんごをつくろうと、砂の上に庭の隅のふきだまりの乾燥した土をつけていたが、今だにおだんごづくりは連続し、どうしたら硬くなるだろう」とくふうしてはまねしあって、水をちよつとつけては砂をつけ、また土をかけたまたちよつと水をかけ、また砂をかけた。それでもまだだめでライン引につかう石灰がこぼれていたのをみつけ蟻のようにその粉をたどっておだんごにかけ、これも水、砂、土と交互に長時間くりかえし、物置からちよろちよろでは水をつけ砂をかけた、また物置の粉へと、まるでねずみのように夢中でくりかえし、午前中一ぱいおだんごづくりに精をだすことが何日か続く。その中にじょうぶというのはいさ小い方がよいとわかったのか、また芯は砂ではだめで土がよいというのがわかったのか、山の土を小指の先位にまるめておだんごづくりがはじまった。(四歳二学期) 毎日帰る時

水たまりの舟



は自分のおだんごの倉庫がほうぼうにあり大切な宝物として大事にしまっておく。また明日朝はやくそつと宝物をのぞき、満足そうにながめる。そしてまた続きをしたり他のあそびもする。」

例(四) (四歳三月) 「雨があがつて晴れてきた朝、まだ部屋の前には大きな水たまりがある。『先生外へでいい』、いいわよ水たまりにはいらぬようにね、しばらくして部屋の前をみると、その水たまりに黄色、水色、ピンクの、美しくかわいい舟が浮かんでおり、小さいかわいい手で波をおこして走らせている。その舟は牛乳のセロファンの上紙の中に牛乳の蓋がはいって浮かんでいる。牛乳をのむとき、取ったままの状態で浮かんでいる美しいかわいい舟なの

音楽にあわせて



だ。私も僕もと同じ舟がたくさん浮かび朝の光にかわいい影を水にうつしていた。」

例(五) (四歳二月頃から) 「元氣よく幼児体操をする列をつくって庭を行進するのが大すきだ。今日も美しい行進の音楽が流れて一まわりして先頭が部屋へたどりつき行進はおわった。『さあかたづ

けて帰りました』
う、音楽はまだ流れている。『せんせい』声のする方を見ると音楽にあわせて五、六人の女の子が、自由たのしそうにどっている。輪になって手をつなぎスキップでまわったり、ばらばらにスキップでいって手を自由に動かしたり、たのしそう



におどっている。私もおもわず手拍子をうった。」

例(一)(二)は幼児が自分たちのあそびの中であそびの必要性、発展性のためにそこで考え、くふうし、つくりだしているので日常の生活の中に小さいことから大きいことと、私も教師がおどろくような場面がよくみられます。

例(四)(五)は日常の幼児の経験、

絵をかいたりも
のをつくった
り、音楽にあわ
せて体を動かし
たりする、いわ
ゆる教師が意図
して計画したこ
との経験からく
る創造の表現
で、ある程度幼
稚園生活を経験
してきた後にみ
られます。

創造性の指導

幼児の生活をこうして一年たった今、ふりかえってみる時、幼児は常に思考し創造しています。また、教師の与えた経験は微力だが小さいことも積み重ねて幼児の中に大きな力となってあらわれてくるということ、幼児のつくることにしても、動くことにしても、あそぶ日常の生活にしてもみな表現されてくることを思う時、おどろきともにおそろしくもなります。

○幼児の日常の生活を観察し、その創造性が小さい平凡なことでも見のがさず育ててあげる。

○幼児は自分の経験を再現している中に、創造ということに変化してくるので、教師の計画による経験を豊富にし、適切な経験をさせるように考える。

○環境を常にととのえる。これは平凡なことだがおろそかにしない。○教師が常に創造性を養い、教師の能力を錬成することを忘れない。

幼児は刻々と成長しています。一年をふりかえると同時に、以上四つのことを考えてみました。創造性を養うということはまだまだ幼児期にはいえないことで、教師が助言をしたり、刺激を与えたり、のぞましい経験を豊かにさせることによって、幼児の中にある創造性を引き出してそれを培わねばなりません。それは私も教師の役目でしょう。培われる創造性が個人個人の成長に即して、大きな役割を果たしてくれるよう、また新しい学期とともに努力いたしたいと思えます。

いろいろなあそび——四歳児——



守 永 英 子

○自分からあそぶ

子どもは、本来みずからの中に、自発活動し、自己発展する力を持っているといわれる。しかし、新しく入園してくる子どもたちを迎えいれてみると、そこに現われるものは、かなりの個人差がみられる。新しい、幼稚園生活という環境の中にはいり、周囲から受ける新しい刺激につき動かされて、保育室の遊具を次々とさわってみたり、広い園庭にとびだして庭中を探索する子どももあり、また、他の子どもにも働きかけて、すぐ友だちをつくれる子どももある。一方、教師がそばにいてしむければ、泣かずに砂をいじったり、ぶらんこやすべり台にのったりするが、教師が用事で側をはなれると、あそびをやめて、いそいであとを追う子ども、他の子どものあそび

を傍観してたたずんでいる子ども、何もしないで、椅子に腰かけた

り、ふらふらしている子どもなど、いろいろなタイプがある。

先ず、教師としての悩みは、あそび出さない子どもを、どうしたら自分から動き出すようにしむけられるかにある。つまり、危険や、他の子どものさまたげとならないかぎり、遊びの種類を問わず、「自分からあそび出すあそび」が望ましい活動であると考えていつてよいであろうか。

自分から動き出す子どもは、危険やさまたげにならないかぎり、あまりこまかい制約を与えずに暖かく見守り、その活動が妨げられずに快く続けられるように心を配らなければならぬ。砂場にいる子どもたちには、洋服の袖をまくってあげたり、道具を使いやすいように砂場のそばに出しておいてあげたり、積木やままごをしている子どもたちには、必要に応じて場所をひろげてあげたり、ぶらんこや鉄棒をしようとしている子どもたちには、まわったり、こいだりできるように手をかしてあげたりしなければならぬし、自分たちでかなりあそべる子どもたちでも、他の子どもたちとの間のみまづきを解決する力は不十分なので、よく観察して、必要なときは力をかさなければならぬ。また、視線を交したり、声をかけたりして、教師との結びつきを確かめさせて安心させなければならぬ。

自分からうまくあそべず教師にあそんでもらおうとするタイプの

砂の土のしゃぼん玉がきれい



子どももある。時期こそずれていたが、A男もB子も同じような経過をたどった。泣いて教師について歩き、泣きやむと他の子どもたち「草つみにいこう」「ぶらんこおして」などの教師への働きかけを無視して「鉄鬼しよう」「かくれんぼしよう」と、自分のきめたあそびをさせようとする。「それじゃ、かくれんぼしてから、あとで草つみに行きましようね」といっても受けいれない。そしてその日のあそびがおもしろいと、その後も毎日教師を独占して同じあそびをくり返そうとする。あそびが少しもりあがってきた頃、教師がそっとぬけて他の子どもたちの方へ行くと、すぐに気がついて追ってきては、ベそをかいいたり、そのあそびを続けるように主張する。このようなタイプの子どもには、最も手がかり、他の子どもたちと接する機会をのがしてしまふのが悩みであった

が、まだ教師を必要とする子どもたちを同じあそびに誘い入れることで多少緩和した。しかし、ともすれば、このような子どもに独占されてしまう教師には失望を感じたのか、誘っても加わらずに、ちらりと横目でみながら庭ですれちがうグループもあったようである。傍観的な子どもたちには、眺めているあそびにはいるように誘ってみる。「お砂場する？」と誘っても黙ってにこにこしている子どもには「〇〇ちゃんがおいしそうなアイスクリームつくってわ。ひとつ下さいな。先生といっしょにたべましようよ」といっしょにたべるまねをしたり、「こんどは、あなたが先生につくってくださる？」などと、その場所やそこにいる子どもと関係づけてあげることが役に立つようである。

何もしない子どもにも、勝気さや用心深さから、なかなか自分を出そうとしないものもあるし、何をしてよいか自分でわからない子どももあるように思われる。教師は、その子どもの好きそうなあそびをみつける手伝いをしなければならない。そばに腰かけて絵本をひろげてみたり、クレヨンと画用紙を出してあげたり、小さな卓上積木をくずれる程高く積んでみせたり、すべり台やジャングルに誘ったり、鬼ごっこやかくれんぼの時は、教師が手をつないでいっしょに鬼になったりしてみる。しかし用心深い子どもなどは、自分で環境を見極め安心できて自分を出しはじめるまで、あせらずに待つてあげる程の心のゆとりが教師の側にも必要かもしれない。

いろいろなタイプの、いろいろな段階の子どもを相手に、目のまわる忙しきではあるが、やはり、それぞれの子どもの、それぞれの活動を大切に、教師のプログラム通りに動かされるのを待つのではなく、自分の興味につき動かされて、興味の対象に自分から働きかけていくという積極的な姿勢を、園の生活の基盤にしたいと思うのである。

○友だちとあそぶ

新しい生活に少しなれてくると、同じすべり台で、同じ砂場であそんだなどという機会をきっかけに、友だち関係ができてくる。「君名前なんていうの?」「ぼく○○○○っていうんだよ、君は?」などの子ども同士の話も耳にすることがある。教師の助力がその関係を促進するのに役立つ時期である。

砂型であそんでいる子ども、バケツに砂と水を入れてセメントをつくっている子ども、じょうろで水をまく子どもなど勝手にあそんでいる子どもたちの中に、教師も加わって、山をつくりはじめたり、川をつくったりする。「○○ちゃんの川と続きそうね」「続けちゃおうか」などと発展してくると「何してるの。手伝ってあげる」「いれて」と参加者も多くなる。そして教師を媒介として、他の子どもとの関係も進む。

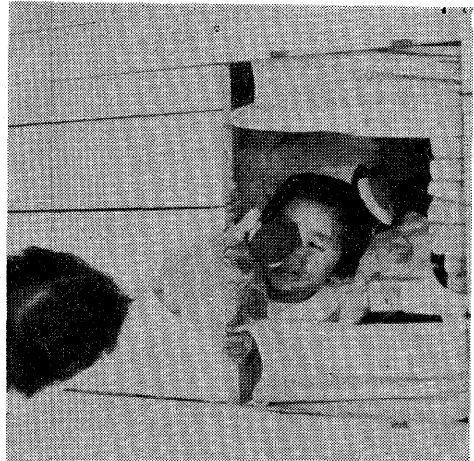
友だち関係を促進するような遊びを提供することも、子どもたち

の間の触れ合いを盛んにするために役立つようだ。よくあそばれているままごとを中心に、いろいろなあそびを提供しようと思い、子どもたちがいくお店はどこかをきいてみる。花や、やおや、お菓子や、魚や、果物やなどがあげられる。「床やさんにもいくよ」とC男がいうので、床やを含めて、いろいろなお店をつくることを計画してみる。計画といっても、子どもたちが、先の見通しのもとに活動することは無理なので、折々に、花や、野菜や、魚や、お菓子をつくる結果いろいろのお店ができたといった経過をとった。作る活動で、最も子どもが喜んだのはケーキ作りで、小さな箱のケーキに、きびがら、紙のバックング、色紙などで飾りをつけて、かわいらしいケーキがいくつもできあがった。お店やさんごっこは相手が必要とする遊びなので、「私、お花やさんよ、買いにきて」「ケーキ下さいな」などと、ままごとの子どもたちとも交流があり、子ども同士の交渉を盛んにすることは役立った。口が重く、友だち遊びに積極的でないD子なども、床やさんのお客さまになることで、他の子どもと接する機会を作ることができた。

友だち関係が盛んになると、はじめは単独飛行だったブロックキャップのサンダーバードやロケットも、発射台が協力して箱積木で作られ、グループあそびに発展したし、ままごとの窓を使って人形芝居をするグループも、観客席を作って「見にきて」と教師を呼ぶほど、子どもたちだけであそびが運ばれるようになった。



さあこれから始まりますよ



○ルールのあるあそび

共通なルールに従ってあそべるようになることも大切なことである。集団生活の中では、「きまりを守る」ことが、どうしても必要となってくるので、このようなルールのあるあそびは、その態度を育てるよい機会となる。

入園のごく最初から遊ばれる「鬼ごっこ」や「かくれんぼ」も、はじめはごく単純な形であそばれる。つまり、教師対子どもたちの関係で、教師が鬼になったり、子どもは全部逃げたり、かくれたりする、あるいは交替に子ども全員が鬼になり、教師が逃げたり、かくれたりする。このようなことから、次第に「こんど、ぼく鬼になる」と名のり出た子どもが鬼になったり、希望者が多くなれば、じやんけんできめるような、本来の形をとってくる。

教師と一しょにあそんだ楽しい経験は、子どもたちだけではじ



一本が、「リレー」など、教師と何度か経験するうちに、自分たちで数人集まってあそび始めることもできるようになる。うずまきあそびなども、一、二度教師から誘いかけてあそんだ何日かあとで、自分たちで仲間を集め、じゃんけんで二組に分かれて、リーダーと二、三人が石灰でうずまきをかいてあそびはじめたのは、三学期に

るあそびの中にとり入れられ、

あそびを豊かに

するから、時々、

新しいゲームを

紹介することも

よい。木鬼、鉄

鬼、たか鬼など、

知っている子ど

もも多いが、丸

鬼などは、年長

組や教師の刺激

によることが多

い。「あぶくた

った」「花いちも

んめ」「竹の子

はいつてであつたらうか、まことにみことなあそびぶりであつた。

○つくるあそび

自由にするまえるようになってくると、子どもたちは、いろいろなものを作ってあそぶようになってくる。これらの「つくる活動」の中で、子どもたちは、くふうする態度や、いろいろな材料や道具を使う技術を身につけて、あそびも豊かになってくる。

秋も深まって室内あそびの機会が多くなる頃から、あき箱を材料に好きなものを作ることをあそびの中に入れてみる。はじめはセロテープでべたべたとはりつけるばかりの子どもたちも、次第に自動車、船、カメラ、無線機、家などいろいろくふうするようになる。

「この屋根、もう少し厚い紙の方がいいんじゃないかしら」「このカメラ、ほんとうのカメラみたいに、ここ（レンズ）はったらどうかしら」など、材料をいっしょに考えたり、いろいろな材料や道具を次第にふやして、自由に出し入れできるように棚に並べておく。

目新しい材料は新しい刺激になる。割り箸をみつけてE男が作ったのは飛行機。箸のわれ目に翼状に切った紙をはきみ、わゴムでとめる。これは男児の間に流行し、ほとんどの子どもが何台も作ったようであった。左右の翼を別々に作って対称にならないF男に、左右をつづけて大きく三角に切ることを教えているG男。「翼が動いちゃうからセロテープではるといいよ」と自分の研究成果を教えにきて



くれるH男。「ここにマークつけよう」と描いているI男。きっかけはE男の考えた飛行機の模倣から始まったが、それぞれにくふうしている。誰のがよくとぶか競争し、よくとぶ飛行機を作ることになったものに挑んだものであった。

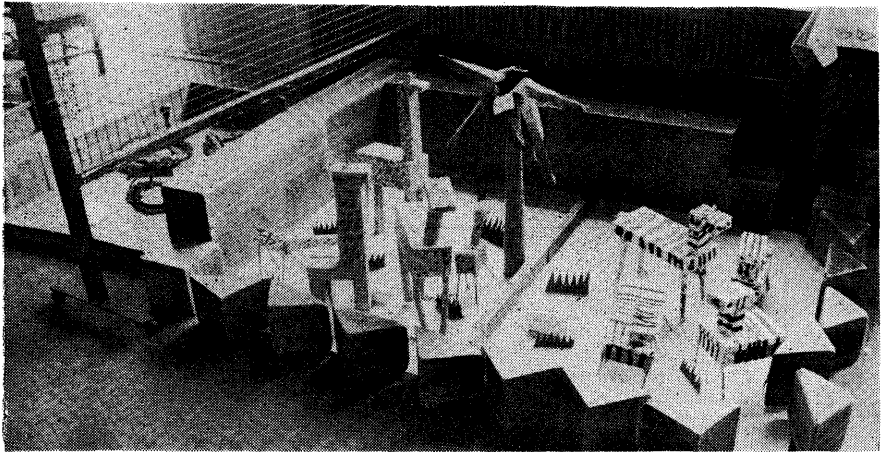
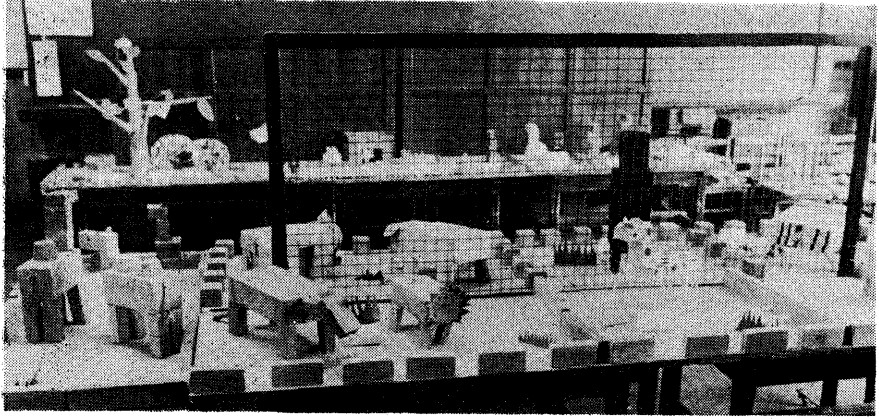
割鋏がほしいという要求がたびたびなので、自由に使えるように出しておいたところ、たくさん使えるということに刺激されて作ったのがギターである。箱の両端に数個ずつ割鋏をさし、対応した鋏にわゴムをかけて絃にし、細長い歯みがきの箱を柄にして、ひいてみせる姿はなかなかかっこうがよく、これも男児の間に大はやりで、割鋏の箱もさ

つぞくからになってしまった。

あき箱でいろいろと作るようになってきたので、三学期は「おもちゃや」でもしようかしらと思っていたところ、園の都合で、動物園をするようにとのことであった。いろいろな情況から考えて、少し無理かとも思われたが、あき箱製作には大分親しんできているところから、あき箱を主にして作ることに、大きい動物を協同製作するのではなく、個人で作ったものを持ち寄って動物園を開くという形をとること、動物園を開くという目的を主にして無理にいろいろな種類の動物を作るという方向でなく、子どもの状態に合わせて規模をきめていくこと、などの方針で働きかけてみることにした。

画用紙、あき箱、あきかんなどで、きつきと作りあげる子どももあり、作るものはきめたが材料を何にしたらよいか迷って手のつかない子どももあり、また、ひとりで、三、四種類の動物を作る子どももあり、一向に自分から作り始めようとしないうちにもあって、いろいろである。材料から刺激をうけて思いつくものを作っていくおもちゃ類は、喜んで作っていた子どもたちも、作る動物をきめて、その目的に従って材料を考えたり選んだりすることは、少しむずかしかつたようである。

しかしでき上がって、動物園を開く段になると、「白熊ないじゃない」「ひょうもないよ」「作ろうか」と張り切ってくれる。「もう間に合わないからこれだけでしましょよ」という私に、「残念だね」といっ



てくれるのは、なかなか関心を示さずに最後
にやっと「おっとせい」を作った一男。他の組
の方やクラスのお母さま方を御招待してみん
な大喜びであった。一部の子どもたちにも教
師にも少し荷が重かったような気がしていた
ができ上がった喜びを子どもたちの中に見い
出したとき、やっぱりよかったと思った。い
ろいろとくふうし努力したあとの成就の喜び
は保育に欠くことのできない経験であろう。

以上、四歳児の経験のごく一部分に過ぎな
いが、大切と思われる、自発活動、友だち関
係、集団生活のきまり、くふうする力の四つ
の点にしぼって考えてみた。思い返すと、こ
の一年間も心に満たないことの何と多かつた
こと。ひとりひとりの子どもを大切にしよう
と思う気持ちも、35人という人数の中で、き
りぎり舞いをしてしまう。幼稚園における
のぞましい活動のあり方、というテーマにつ
いて書くようにこのことであったが、この課
題は、実は、今も、これからも、私自身に投
げかけている課題なのである。

リズムあそび



村井 トミ

幼稚園におけるのぞましき活動の中から、今回はリズムあそびを拾って記してみよう。一口にリズムあそびというが、よく考えてみるとこの言葉からして実にむずかしい。どこまでの範囲をさしているのか？ 体を動かして表現することも、歌をうたうことも、楽器を奏することも、鑑賞することも皆含まれているように思える。そこでここでは、その中の体を動かしてする——動きのリズム——の面について具体的な例を拾って考えてみたいと思う。

○自由に思ったままを……

子どもは幼い頃からよい音楽をきくと、自然に手や足を動かしたくなるのが本能だといわれている。とすると、成長するにつれて更にひとりひとりの子どもが自然の形で、思ったままを素直にのびの

びと表現させたいものである。私のねらいもそこにあった。

だから入園以来、先生の側からでき上がっている動作をはじめから教えたり、示したりして皆がそのとおりにするようなことはほとんどない。たとえ変な表現でもその子どもなりに自分で手足や体を動かして一生けんめいしているのなら、それでよいと思った。(もちろん、手本ということではなく、先生も共にまじって楽しそうにしようにすることはある) しかし、ただやらせっぱなしではないのである。そこでそれぞれの子どもを持つ芽をちょっとでものびるように、先生は助言をしなければならぬ。幼ければ幼い程、ピアノを弾きながらも先生の口は絶えまなく動いているようなものである。

その言葉にさそわれて、いままではよんぼりと小さく咲いていた花も、もっともっと喜々として風にゆれることもできる。とんできた蝶も、もっと軽やかにやわらかいはねを動かして蜜を吸うことにもなる。そうなるとうやうやしている本人自身が本当にその中に没入して行く。先生の発する一言一言がいかに大切かということ(ここだけではないが)つくづく感じさせられる。また、ここで注意しなければならぬことは、曲や歌に無関係に自由に表現するようになりやすいこと、この点に先生の指導が必要となるのである。

○はいりにくい子のために……

入園してくる子どもをみると、十人十色である。リズムあそびにも、よろこんで参加する子どもばかりではない。こんな子どもを無

すきなあそびをリズムあそびのテーマにとりあげる（導入）



理に手をとって引っぱっても、だめなことはみえすいている。あせらず気長にいれることであろう。その間先生は日常のあそびをよく観察して、その子どもの好きな玩具とかあそびとかをつかんでおくことである。汽車をつなげてばかりあそんでいる子もあるだろう。お人形ばかりだっている子もあるだろうし、何かすきなものをみきわめてリズムあそびの時のテーマにいれると案外抵抗なしにはいっていく場合が多い。私の経験した範囲にもこんなのがあった。部屋の中でいつも汽車をつなげて遊んでいる子どもであったが、リズムあそびに汽車をとりあげると、こちらの誘いによってその部分だけはいってくる。あとはぬけてまた椅子に腰かけている。しかしこうなればもうこらちのものである。汽車あそびの前後に、いろいろ関

きれいな花のおめんをつけただけでもうれしくて……



係ある曲をくつつけておくと次第に参加する範囲が広くなり自然の形ではいっていく。

また、簡単なお面をつくってかぶることなどが、きっかけとなつてすつとはいった例もある。

また、今はリズムの時間と改まらずに、保育室の一隅や、ままごとあそびの一部に、庭での蝶々ごっこなど……かえってこういうところからチャンス

をみつけて導入していくことが効果的の場合が多い。うっかりしている又何も気づかずにすんでしまうが、よく気をつけているとチャンスはたくさんある。今の時代だから子どもの好きなロケットや鉄人や怪獣で

ガソリンスタンド「はいじどうしゃくん
たくさんガソリンたべて下さい」



○たのしい計画を……

——生活経験を生かして——

——子どもの発言を生かして——

すら上手に扱えば皆と共に参加する。うれしきかけにならないとはいえない。だからリズムの時間に限らず日頃のおそびから——
二、三人から発展して五、六人に——十数人にとまっていくことがよくあるし、私はこれを尊び、大切に育てようと心掛けていく。
また、中には男の子などではいりたいのに、てれくさいためというのものもある。こういうのはあまり問題はない。先生の方から手をさしのべてあげればすぐにつかまってくる。

そのためには先生の側にもどうやって子どもたちを楽しませようということを考えておかなければならないし、それぞれにふさわしい感じの曲や歌を用意しておく必要がある。同じ曲でも子どもたちがよく動けるようにこちらも勉強しておくことも大切であろう。

例えば「たんぼぼ」を例にとってみよう。ただ「たんぼぼ」の既成のものを教えて皆で同じようにするだけでは、子ども自身で考え出す力も思うままを動きにあらわすチャンスも失せてしまう。そこで、そこを春の野原にみたてるとする。

“いろいろな花が咲いています。今日は、たんぼぼさんも芽を出しました”

“ほら、芽も伸びてきましたよ。ぐんぐんと葉っぱも出てきました”

“かわいいつぼみがふくらんできましたよ”

“どうとうきれいなまっきれいなお花が咲きました”

“やさしい静かな風が吹いてきました。たんぼぼさん、いい気持ちでしょうね、ゆれていますよ”

“おや、たんぼぼさん、どうとうおどりだしました”

“咲いている中に頭のあたりがモカモカしてきました。白いわたげね”

“風が吹いてきて、わたげがふわりふわりととんでいきました。どこへ行くのかしら?”

“お山へとんでいったり、畠の中やお屋根の上や幼稚園のお庭にも

とんでいったかもしれないわね”

”どうとうふんわりと落ちました。どんなかつこうで落ちたかしたら？ 横になったり足が上がったままだったりいろいろね”
などと、音楽と共に言葉を流してあげると、子どもはすっかり「たんぼぼ」になったつもりでやってくれる。

わたげになるところなど、子どもたちは、自分の頭の上を手でモヤモヤさせたり、なでたりして、こちらで見てもいかにもおもしろい。最後にすきな場所にそれぞれの形で落ちたところなど最高にたのしいらしい。

これは助言だけでなく実際に得た生活経験が大いにプラスになる。たんぼぼのわたげなどはいくらも皆でみる機会もあると思うので、そうしたあとに取り上げると実感をとまなび、表現も、指導もやりやすいわけである。幼稚園では教育内容が、一応六領域に分かれているがどれも互いに相重なりあうことが常である。「たんぼぼ」にしてもいろいろと話し合う場をもつことも必要となってくる。いつかみんなでみたたんぼぼ、〇〇がどこかで、こんなになっていたと発言するだろうし、動きの途中でも子どもの発言は大いにとりあげて生かすことが大事である。

ただここで注意しなければならないのは、いくら子どものすきなように考えさせるからといって、先生は何も考えない——というのはいけない。一応子どもの発達を考えて研究した上での原案はもっていないなければならない。そして先ず子どもに自由にさせてみて、

必要ならばその原案を出すこともある。また、先生の原案よりも、子どもの方が、もったいにかにも子どもらしいものを投げ出して、なるほどと思わせられることもある。子どもは大人の常識的な考えをやぶってくれることもしばしばあり、大人は大きな目を見はってこれを見つめなければならぬ。

この一年（五歳児）子どもたちと遊んだものの中から、いくつかの例を拾ってのせておく。

(1) 花が咲く 種子をまく—芽が出て—葉が出て—花が咲いてゆれる
—花のダンス—蝶がとんできて蜜を吸う—みつ蜂がとんでくる—
みんなでいっしょにたのしく踊る。

(2) えんそく おべん当をつくる—電車にのる—はらっぱにつく—草
つみ—ブランコやシーソーであそぶ—おべん当を食べる—小鳥や
りすや兎の小舎をみる。

(3) 幼稚園ごっこ 幼稚園にいく—砂あそび—ブランコ—すべりだい
—ままごと—汽車あそび—なわとび—まりつき—鬼ごっこ—おゆ
うぎ—おべん当—などなど。（先生や生徒に分かれたりして、〇
〇するものこの指とまれ、などをつなぎにするのもおもしろい）

(4) 雨ふり 小さい雨—長靴はいて傘さして水たまりをとぶ—大きい
雨（夕立）—にげて木の下にかくれる—雨だれ—葉っぱが雨にぬ
れて光る—小鳥や虫がいそいで逃げる—蛙やかたつむりがよろこ
んで出てくる。

(5) 海でのあそび 海で泳ぐ—とびこみ—舟のつって沖へ出る—魚を

つる（いろいろの魚になってつられる）―貝を拾う―波が押しよせる―にげる―長い列をつくってポートレースをする（しんぱん、応援なども）

(6)しゃぼん玉 そうっとしゃぼん玉をふく―しゃぼん玉がだんだんとふくらむ―ふわふわとんでいく―とびながらいろいろのものをみる―次々と見たものを表現する。

(7)動物園 すきな動物になる（グループがいくつもできる）―見物人がくる―柵の中の動物はおどつてみせる。

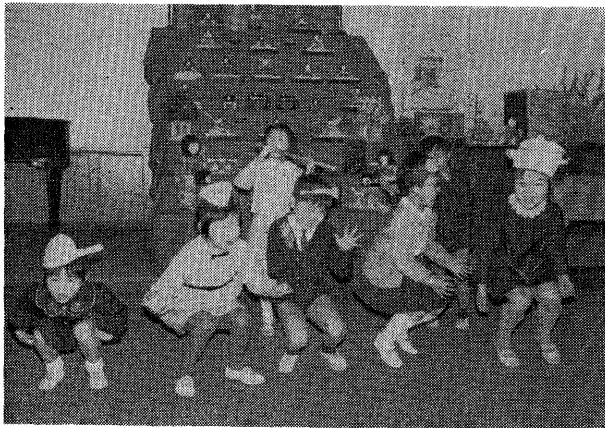
(8)ゆうえん地 飛行機―メリーゴーランド―豆汽車―コーヒーカット―ジェットコースターなど次々と切符を買っては乗って遊ぶ。

(9)木の実と落葉 木になった子どもに落葉や木の実になった子どもがくっつく―風が吹いてまわる―木の葉もはげしくゆれる―木の実はころがり、葉はひらひらと空を舞ってちる。

(10)おもちゃ箱 夜中におもちゃ箱がにぎやかになる―すきなおもちゃになって踊る―朝になって、おもちゃ箱に帰ってしんとしている。

(11)サンタクロースごっこ 雪の子、サンタクロース、そり、子ども、ツリー、プレゼントのおもちゃなどになる。子どもたちがツリーのかぎりつけをする―ねむる―雪が降って、おじいさんがそりにのってくる―そうとねむっている子をのぞいて、いい子にプレゼントを置いていく。（袋の口をあける度に、おもちゃにな

ふしぎな笛につられておなべやフォークまでおどりしました



った子どもが走り出て、しゃがむ）―朝になって子どもたちが目をさます―おもちゃに踊ってもらう―子どももいっしょに踊る。

(12)お正月のあそび はねつき、まりつき、凧あげ、カルタとりなど、自分がまわりになってつかれたり、凧になってあげられたりする。

(13)雪だるまつくり 雪が降る―雪をころがしてつくる―雪だるまに目鼻をつける―お日様が出てくる―次第にとけはじめるとけて水になる。

(14)ふしぎな笛

笛吹きの子がたのしそうに吹く―いろいろの動物がつられて出てきて、それぞれに笛に合わせで浮かれて踊る。（または台所のお鍋やスプーン、フォークまで）

(15)春がくる ねむっていた草

や木や動物が目を見ます—春のやさしい風が吹く—ボカボカと暖かい太陽があたる—よるこんで「春がきた」で皆で踊る。

○基礎の動作も……

こうやってすきなように表現したりあそんだりしている間に、一番根本となっている、歩く、走る、とぶ、の三つを音楽に合わせてあそばせる。ただ歩く練習というのもつまらないであろうから、どこかへ出かけることにでもして(歩く)、少し急ぐことになれば(走る)ことにもなる。山に來たので登れば(おそ足)にもなるし、水たまりをとべば(両足とび)にもなる。広い野原にきたのでよろこんでとべば(スキップ)にもなるというようにちょっと意味づけてあげればよろこんでしてくれる。また歩くにしても前に歩いたり、後に歩いたり、横に歩いたり、とまったり、ある部分で一まわりしたり、音の変化や強弱なども加えてすると興味をもつてさせることができると思うので、表現あそびと共に平行していききたいことである。

○表現のくふうを……

ひとりひとりの表現が充分にできるようになり年長組ともなれば、友だちと二人(または三人)で相談して何か一つのまとまったものを考えてさせる。曲をひいてその間に考えさせる。グループによってそれぞれいろいろのものができる。そして互いに表現をみせ

あう。自分たちの考えたものをよるこんで見せ、また友だちのを見ることをよるこぶ。そしていいしげきとなる。

ここに子どもたちから生まれたものの中から、五つ六つの例をあげてみる。

- ・一人が花になって咲き、他の一人がジョウロで水をやっている。
- ・一人が臼になって、他の一人が杵でつく。
- ・一人がまりになり他の一人がつく。
- ・一人がピアノになり、他の一人が弾く。
- ・二人で一つの時計となり、その中の一人が針になって動く。
- ・二人で一羽のくじやくになる。(一人が体で一人が尾の大きいはねになる)
- ・二人で、一匹のキリンや馬になる。
- ・二人で向かい合って羽根をつき、中央の一人が羽根になって右へ左へととばされる(三人で)
- ・などと書きあげればきりが無い。

そして今度はどうしようか? と表現を考えることをたのしみにする。更に発展すれば数人—十人位でも、一つの曲をきいて相談して一しょにおどることもできる。こうなるのは五歳児も終わりのことであるし、皆はりきって楽しさも絶頂というところであろうか。

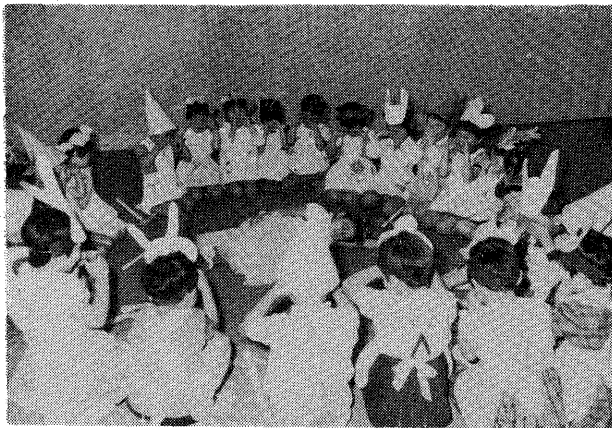
○リズム劇あそび

劇あそびもいろいろあって、言葉を中心として音楽が加わったも

男の子がねているあいだに、ぬき足、さし足、金の
がちょうをとりにきました



白雪姫がしんじやった、こびともどうぶつたちもな
きました、エーンエーン



たくさんの費用をかけて、クリスマス
とか、ひなまつりなどの行事のために
(すなわち人にみせるため)でなく、日
頃から手軽に劇あそびをして子どもたち
をたのませたいものである。

のと、言葉は使わずに音楽だけで動くもの、また、音楽だけで動
き、説明は動きにかぶせて他の者がするなどいろいろな方法がある
が、ここでは前述の關係上音楽だけで表現するリズム劇をとりあげ
てみる。日頃の表現活動が活発ならばリズム劇もストーリーが少し
大きくまとまったようなものといえる。それぞれの話の筋を追って
一応全員でひととおりしてあそぶ。(全員がお姫さまになったり、全

員で兎になったり)あとで希望のものを選ぶ。はじめは一人のはず
の王子が五人いても十人いてもかまわずに満足するだけ遊ばせる。
そしてそれぞれの持ち場の表現は各自に充分にさせる。先生の流
す言葉や、友だちの発言などによって、しのび足は、更に実感がこ
もり、びっくりした表現も、よろこびの表現も大きくなることであ
ろう。最後に希望の者が多い役はジャンケンでもして決め、それぞ
れ役を得て、自分のおめんや小道具をつ
くる。なるべくまわりにあるその辺のも
のを利用して、大きな衣装や道具にし
ないで感じを出すことを、先生も子ども
と共にくふうしなければならぬ。子ど
もはせっかちである。早くつくってすぐ
にも使いたがる。こったものより、あっ
さり子どもの力でできる程度のもので
つくらしたい。先生も大いにアイデアマ
ンでなければならぬ。

卒業前の幼児の活動の実際



富 樫 純 子

○ひなまつりの相談

この一年間をふりかえってみて、一番印象の深かった卒業まぎわのころの、子どもたちの活動の実際を中心として考えてみたいと思う。この幼稚園では、例年三月三日に年長の二組が中心となつて、ひなまつりのあつまりに、劇あそびやゆうぎ、うた、楽隊などいろいろ計画して、お母さま方も招待して、楽しい一日を過ごすことになつてゐる。この組の子どもたちも、ひなまつりまで、はりきつていろいろの準備にいそしんで活動をしたので、そのことにふれてみよう。

二月の半ばすぎ、子どもたちにひなまつりに何をしようかと相談し、話し合う機会をまず持った。昨年一年の年長組のひなまつりのときのこともおぼえているし、子どもたちもはつきりと意思をもつてい

ることだし、今までも二年間なり三年間なり、子どもたちの意見をできるだけ尊重して、自発的な活動をもりたてるように努めてきているので、この最後の子どもたちの一番充実した時期のひなまつりのあつまりも、子どもの発言や気持ちを大切に、教師の計画だけを押しつけないと思つた。もちろん教師の方には、いろいろ計画をもっているわけだが、子どもたちの本当にやりたいという活動をできるだけ取り上げるつもりだつた。

やるものについての話し合いは、二組合同で歌と楽隊をするこゝと、この組で何かやりたいものをみんな考えて、やりたいものが一つときは、みんなで参加し、もし希望で二つになつた場合は、その一つをえらんで参加するという形で示した。ペープサート・人形芝居、紙芝居、劇あそびなどのうち何がよいか、何にしようかと話し合いは活発に行なわれ、その結果、紙芝居と劇あそびがよいということに第一回の相談はまとまつた。紙芝居、劇あそびについては、そののち何回か話し合う機会をもつた。

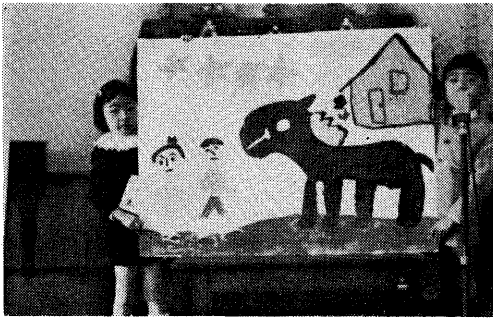
○紙芝居の製作

紙芝居を希望したグループから題材をきめることにした。紙芝居は絵が表現しやすい、場面もとらえやすい、筋も単純、出てくるものも子どもたちの希望でできることなどをあわせ考え、「くろのおきゃくさま」のはなしをえらんで、子どもたちにきかせてみた。子どもたちも喜んでこれに賛成して、出てくるおきゃくなど子どもた

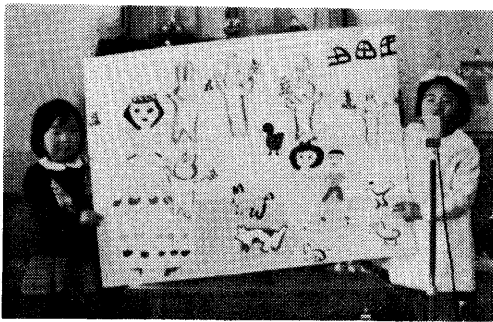
ちの希望も合わせて、紙芝居をかく順番なども相談してきめた。希望者の多い場面は、ジャンケンなどにより、他の場面にまわるなどして、それぞれ十二場面を分担した。広い場所で演出するため、大きい紙にえのぐで絵をかくことにし、一枚を一人でかく。これは当日の紙芝居発表のことを考えて、自分でかいた絵について話すようにするためである。



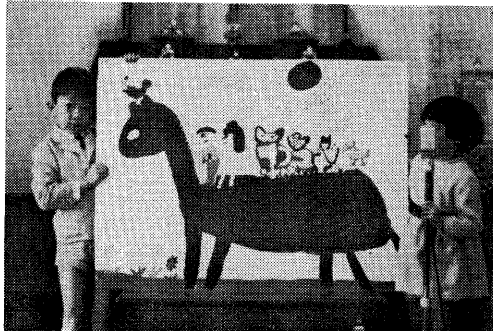
①「これから僕たちのつくった紙芝居をはじめます」



②「くろが歩いて行くと道で俊夫さんにあいきました」



③「うきぎのこてんからかえるときおひめさまはみんなにおだんごを下さいました」

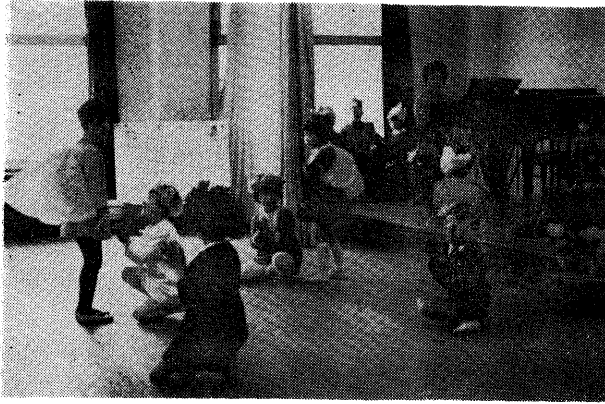


④「かえりもみなくろのせなかのにつかえってきました」

いよいよ紙芝居をかく段階になり、男の子と女の子の洋服の色や靴の色は、同じ目だから同じでなくてはおかしいという子どもが発

案で相談し、出てくる動物なども、犬はぶちにしたら、あひるやこどりの色はどうか、おひめさまの洋服のもようはどうしようかなど本当によく自主的に話し合ってきた。えのぐを使ってかくときも、紙が大きいので友だちがえのぐの筆をしばってわたしてあげるなど、協力して一つの目的にむかっている場面も多くみられた。絵がかけてからどうい話をしようかということも、自分たちでめいめいが考えることにした。前の人が次の場面の分まで話してしまったところなども出てきたりして、そこは話し合ったり、あると

「あかずきんちゃんどこに行くの」「おばあさんおみまいに行くの」



あかずきんもおばあさんもたすかり、よろこんでゆうぎをしているところ



あかずきんちゃんのげきをしたおともだちみんなで



きは教師も相談に入り適切に助言したりもした。こういう内容を話すという大筋だけきめ、いろいろ考えるように仕向けたので、それぞれの子どもたちが、独創的によく考え、三、四回の練習でも話すことが固定しないで自分の思ったことを素直に発表してきいていて楽しいくらいだった。言語発表が充分でない子どもには、こういったらどうかなど友だち同士で助け合って協力しあう、ほほえましい光景もみられずいぶん成長したと感無量のおもいのときもあった。

○劇あそび

劇あそびは、子どもたちのやりたいという題材をえらんで取り上げたいと思った。赤ずきんをしたらという発案と、ふしぎなくにのアリスはどうかということになり、小さい組にわかりやすいということで、赤ずきんをすることに話し合ってきた。出てくるものや場面なども子どもたちと相談した。最初はまず自分のなりたい役になり劇あそびをした。筋や出てく

る順序、せりふなども子どもたちの考えをできるだけ取り上げて発展していくようにした。それから配役をきめることになり、希望者の多かった赤ずきんは、くじで、その他にも希望の多いものは、ジャンケンできめたり、お母さんのように、赤ずきんより大きくてお母さんらしいということでお母さんを希望したの中から、すいせんで決められた役もあった。

年長組の最後の劇なので、せりふを無理でない程度に入れたいたい、暗記したせりふをいうという感じでなく、ごく自然に話すよ
うな調子で言葉を入れるように指導した。それぞれ役で各自が思
いのままに発表したり、表現したりさせ、子どもの動きをよく見て
適当な音楽を入れ、自然に動作や表現ができるようにした。曲がよ
いものがなかったり、気が小さい子どもの言葉がすらすら出ないこ
ともあったりしたが、はつきり思うことを話せた子どもをほめては
げましたり、特に気の小さい子どもの指導にあたっては、簡単な言
葉でも、その子どもの中から引き出すようにして、安心していえる
ように心がけ、友だち同士でも互いに考え合ったりして、みんなで
力を合わせて、一步一步劇あそびをつくり出していった。

劇の小道具も相談して協同でつくったり、分担してつくったりし
た。各自のおめんなどもいっしょうけんめいにつくり、子どもなりに、
いろいろくふうして個性のあるものができ上がっていった。こ
うしたらという子どもからの発案はできるだけ取り上げるように努
め、一つの目的にむかって、みんなが力を合わせてはりきって忙が

しい数日を過ごした。一方、あまり練習をして劇が固定して、創意
がないものにならないようにも気をつけ、当日を興味の山にもって
いくような配慮もした。これと平行して、二組合同の歌や楽隊など
も練習して準備をすすめた。
待ちに待った三月三日は次のようなプログラムで会がすすめられ
た。

ひなまつりプログラム

- 一、うた(うれしいひなまつり) みんなで
- 二、園長先生のおはなし
- 三、げき(あかずきん) うみ
- 四、うた(じどうしゃうんでん・あくしゅでこんいちわ) もり・いけ
- 五、ゆうぎ(ふしぎなふえ・はなつなぎ) やま
- 六、うた(ふしんば・よつかど) やま・うみ
- 七、かみしばい(くろのおきやくさま) うみ
- 八、げき(きんのがちょう) やま
- 九、うた(トンツウツウトン・ありさんのおはなし) はやし・かわ
- 十、がくたい(はるがきた・かっこうワルツ) やま・うみ

当日は劇あそびも紙芝居の発表も歌や楽隊も、おきやくさまがた
くさんで嬉しく、子どもたちは大喜びではりきってやった。

お母さま方も楽しそうに、にこにこしてみて下さり、幼稚園時代
の思い出の一つのひなまつりのあつまりは、なごやかなよい日だっ
たと思う。

○卒業のころ

ひなまつりのあとは、幼稚園時代の記念になるアルバムにはる絵をかいたり、きりがみをしたり、お友だちにあげる絵の最後の仕上げをしたりした。また春の自然のもとでおおぜいのグループでの友だちあそびが盛んで、残り少ない幼稚園生活を十分に満足して、のびのびと楽しく過ごした。

子どもたちも幼稚園が名残り惜しいらしくもって幼稚園にいたいといったり、先生とのお別れがさびしいからといって、先生もいっしょに学校にいつてねと可愛らしいことばもきかれた。先生ね、僕は大きくなったら飛行機のパイロットになってのせてあげるよ。わたしは、病院の看護婦さんになるから、病気のときは、いらっしやいよ。など……

子どもの夢や希望は、はてしなく広がっていくのだった。

放課後になり、アルバムの写真を整理して、入園当初のあどけなかつた子どもたちのことを、あらためて思い出し、この幼稚園時代の子どもたちの成長のめざましさに驚いたり、喜んだりもした。すぐ友だちとけんかをしたり、友だちあそびになかなかはいれなかつたり、きまりがまもれなかつたりした子どもたちも、卒業のいま、それぞれ立派に成長して、どの顔もどの顔も、四月からは小学生として元気に学校に。これからも、いろいろな困難なことに出会っても、自分たちでよく考え、よく学んで、すくすくとたくましく伸びてくれることを願っている。

日本幼稚園
協会主催

幼児教育講習会

第一部 午前の部 九・〇〇—一二・〇〇

期日 昭和四十二年七月二十二(土)日—二十五(火)日

会場 お茶の水女子大学講堂

講師

東京大学名誉教授 海後 宗臣氏
日本教育学会会長

お茶の水女子大学教授 平井 信義氏

十文字女子短期大学教授 林 健造氏

お茶の水女子大学講師 坂元彦太郎氏
お茶の水女子大学教授 同 附属幼稚園長

第二部 午後の部 一・〇〇—四・〇〇

期日 会場は第一部と同じ

講師

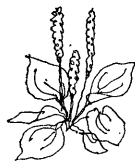
お茶の水女子大学名誉教授 戸倉 ハル氏
日本女子体育大学教授

◎講演題ならびに時間割は次号でお知らせいたします。

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会

幼児の健康をめぐる諸問題



松 本 幸 久

小児は次の世代の担い手であり、希望と期待をいっぱいにはらんでいる蕾である。小児が健康に発育成長して立派な花を開くように、われわれはその保育に努めなければならない。

一歳から学齡前までのいわゆる幼児期は、心身の発達のうえでもいろいろな変化がみられる時期であり、種々の病気に對する抵抗力も弱く、健康についての関心もまだ漠然としているので、幼児期における健康の指導や管理は極めて必要であり、かつ重要である。そこでその際留意しなければならぬいくつかの問題をとりあげて、保健学的考察を加えてみたい。

一、幼児死亡

幼児死亡率は乳児死亡率と同様に戦後順調に低下している。

例えば一〜四歳の幼児死亡率は、昭和三〇年には人口十萬對四一〇であったものが、同三十九年には一四七と過去十年間に三分の一に減少し、五〜九歳では同期間に一二九から六三と半減した。幼い年齢の方が改善度が高いという結果がでてゐる。

これを國際的に比較してみると、一〜四歳で歐米諸国の二倍を示しており、五〜九歳でも欧米諸国は四〇〜五〇以下の死亡率に對し、わが国では七〇・六と類例のない高率を示している(表1)。このことからわが国においては幼児死亡の改善の余地があるといえる。

以上のようにわが国の幼児死亡率が高いのは、不慮の事故、肺炎や氣管支炎、胃腸炎及び赤痢などによる死亡の多いことによるものであり(表2)、社会環境、環境衛生、疾病予防及び

医療対策の改善をさらに徹底させることが必要とされるのである。

二、不慮の事故

幼児死亡の中で不慮の事故によるものが最も多いということは、誠に悲痛なことである。一〜四歳の死亡の約三分の一以上を占めており、昭和三九年には、一〜四歳で約九二〇〇名の死亡であったが、そのうち約三六〇〇名が事故死であり、五〜九歳では約五〇〇〇名のうち二一〇〇名が事故死であった。

事故の種類では水と車によるものが大部分で、溺死は男子に圧倒的に多くみられる。国際的にみると一〜四歳の溺死の死亡率と老人の溺死の死亡率がわが国では著しく高いことが注目されている。これは誤って水に落ちて溺れることが多いので、幼児や老人を危険な水から守る必要性が強調されなければならない。また自動車事故でも国際的にみても一〜四歳の自動車事故死亡率は欧米の二倍前後の高い値を示しており、幼児の保護や遊び場の問題が強調される所以である。

家庭における事故は、食物、異物などによる機械的窒息、墜落、火傷などが目立っている。必ずしも死にいたらなかったものも含めた家庭の事故については東京消防庁や日本総合愛育研

(2) 究所の調査報告

が参考になるが、幼児のなかでも一歳児の事故が最も多く、誤飲事故、転倒事故、転落事故、火傷事故が多く、受傷部位は顔面、頭部が多い。

二歳児では生活の範囲が拡大し、家庭内の事故のほかに庭、道路上での事故もみられるようになる。一歳児と同様に、転落、転倒、火傷

表1 幼児死亡率の国際比較

(各年齢階級人口10万対)

(1962年)

	1〜4歳	5〜9歳
日本	187.6	70.6
カナダ	112.4	52.7
アメリカ	98.1	45.5
デンマーク	84.1	43.5
フランス	116.6	42.2
イタリア	184.2	57.6
オランダ	109.0	48.0
イギリス	85.7	38.4
スウェーデン	76.6	44.2

(国民衛生の動向, 1966年版による)

表2 主要死因別幼児死亡の国際比較

(各年齢階級人口10万対) (1962年)

1〜4歳	総数	不慮の事故	肺炎					その他
			支気管炎	胃腸炎	赤痢	赤痢	その他	
日本	187.6	61.5	28.8	17.0	8.0	72.3		
アメリカ	98.1	30.5	14.4	3.0	0.3	49.9		
イギリス	85.7	19.6	16.2	4.1	0.1	45.7		
スウェーデン	76.6	31.4	7.2	6.3	—	31.7		
5〜9歳								
日本	70.6	25.2	5.3	3.6	3.4	33.1		
アメリカ	45.5	18.1	2.6	0.4	0.1	24.3		
イギリス	38.8	13.0	3.6	0.3	0.1	21.4		
スウェーデン	44.2	19.4	1.9	0.2	—	22.7		

(国民衛生の動向, 1966年版による)

事故も多いが、切傷とかはきむとかの事故も増えてくる。他人の行為を予測することができないので、他人の傍で巻き添えを受けて負傷するという事故も多くなる。

三歳児では屋外の遊びが活発化して、事故の数は増加して行く。単純な歩行技術の未熟さによる転倒事故ではなく、空地などで友だちと遊んでいる時に大きい小児に突きとばされて転倒するという種類の事故が増加してくる。三歳児は心身の発達からみても非常に画期的な時期であると同時に、事故の面からも注意を要する時期である。

四歳児になると事故はやや減少してくる。知覚、判断力などの精神発達によるもので、平衡感覚も発達し機敏に体の位置を転換して、自分の安全を守り、ある程度は可能になる。遊びのルールに対する無理解、遊びの技術そのものの未熟さ、社会性の未発達などに起因する事故が目立ってくる。また誘引力に富む目標があると、自分の能力とか周囲の状況を考えないで、いきなりその目標に突進してそのために重大な事故をひき起こすこともみられる。

五、六歳児では自転車に乗っていて転倒するとか、友だちと相撲をして倒れたはずみに足の負傷をするという事故がみられるようになる。母親などと一緒でない時の事故が多い。

一般に事故対策として三E—Education, Engineering,

Enforcement が必要であるといわれているが、幼児の場合も例外でなく、幼児に対する教育あるいは親や運転手に対する教育、自動車や標識などの工学、法律的規則が役に立つのである。例えば三歳以上の幼児なら、水の深さ、火のあつさを具体的に教えるとか、幼児の遊びの中で交通安全道徳の観念を育成することを試みたり、街路の交差点や道路上で実際に手をとって教え、くり返し幼児がひとりで行けるまで見守るという忍耐強い指導が必要である。親に対しては幼児の行動の特徴について十分に理解させるとともに、安全な環境を整えさせるように指導する。また救急法も保育の常識として身につけさせたい。救急法の一部については「幼児の教育」³⁾にすでに紹介したが、学校教育以外に幼稚園、保育園の母の会とか保健所の育児学級などで講習会が計画されることを強く期待したい。

三、疾病の予防

幼児に多い伝染病としては、はしか、百日咳、ジフテリア、日本脳炎、水痘、流行性耳下腺炎、赤痢（疫痢を含む）、急性灰白髄炎などがあげられる。疾病によって多少の起伏があるが、幸いにも全般的にはその罹患率は減少してきている（表

表4 定期予防接種の時期

	I	II	III	IV
痘 瘡	生後2～12カ月	小学校入学前6カ月	小学校卒業前6カ月	
ジフテリ ア	生後3～6カ月	その後12～18カ月	小学校入学前6カ月	小学校卒業前6カ月
百日咳	同上	同上		
腸チフス パラチフ ス	生後36～48カ月	60歳まで毎年1回		
急性白 髄炎	生後6～21カ月			
結 核	30歳まで毎年1回 (ツ反応陰性者および疑陽性者)			

表3 幼児期に多い急性伝染病の年次別り
患率 (人口10万対)

年	赤痢 疫病	しょう 紅熱	ジフテ リア	日本 脳炎	ポリオ
1950	59.8	6.2	15.1	6.2	—
1955	91.9	15.3	17.6	4.2	1.3
1960	100.6	9.4	16.0	1.7	6.0
1961	97.1	6.6	10.4	2.2	2.6
1962	77.7	8.8	7.8	1.4	0.3
1963	72.6	16.7	5.1	1.3	0.1
1964	53.9	13.3	2.9	2.8	0.1
1965	49.5	10.9	2.2	1.2	0.1

(国民衛生の動向, 1966年版による)

3)。これらの疾病の一部については「幼児の教育」ですでに紹介したので参照されたい。

これらの疾病の予防対策として予防接種が行なわれているものは早めに予防接種を実施して、感受性の低下を図り、予防接種のないものには一般的予防対策を考慮しなければならぬ。

予防接種の方法の進歩にともない、幼児期にうける予防接種の種類も次第に多くなってきたので個人毎に

ようにたてるべきかを考えておかねばならない。予防接種法および結核予防法による定期予防接種と時期について別表に示した(表4)。このほかに日本脳炎、インフルエンザ、はしかに対して予防接種が完成している。はしかワクチンによる接種は昨年から一般に実施されるようになったもので、はじめに不活化ワクチンを注射して四～六週後に生ワクチンを注射するという方法である。五年位は免疫が保持されていると考えられ、副反応もせいぜい三七・五度C以上の熱がでる率は二〇%位とされている。はしかは法定伝染病でないのでこのワクチン接種は保健所ではまだ実施しておらず、病院、診療所などで希望者に実施されている。

以上の疾病のほかにリュウマチ熱、腎臓疾患などが増加の傾向がみられる。

リュウマチ熱は二～三歳からかかり、五～十歳位に最も多く、十五歳をすぎると少なくなる。治りやすいが長びくと一～二年以上、中には十～二十年も経過し、次第に心臓弁膜症を起こしてくるやっかいな病気である。早期に徹底した治療を行なうことが最も大切である。

流行性腎炎は五～十二歳位の小児に最近特に増加した病気で、診断がおけると半年～一年位臥床しなければならぬ

で、幼児が発熱した時はよく尿を検査するなど早期発見が必要である。

四、米 養

幼児は運動が活発であり、発育もさかんで一日に二二〇〇～一五〇〇カロリーの熱量と五〇g位の蛋白質を必要とする。三回食だけでは無理で、一～二回の補助食的な間食も必要である。幼児では偏食とか食欲不振が問題になると同時に、過量の食事摂取などに起因する肥満児の問題も起こってきている。肥満児とはその症例の身長に相当する体重を二〇%以上、上回っているものと定義されているが、肥満であるための劣等感、高血圧、呼吸不全などが障害としてあらわれる。また肥満児の五分の四は大体そのまま肥満成人になるといわれているので、成人になってから種々の成人病にかかりやすい。

肥満症の原因は過量の食事摂取のほかに、遺伝的素因、情動ないし精神障害、内分泌障害などの原因がいろいろと組み合わされていると考えられる。治療法としては低カロリー、低炭水化物、正常脂肪、高蛋白質として食餌を与えるのを原則とするが、親子関係の調整も必要な場合もある。予防として身長よりみた標準体重よりも十一〇～二〇未満の間に対策を考えること

が大切である。

以上幼児の健康をめぐる諸問題に考察を加えたが、幼児の健康の保持増進にいささかなりと役立つならばこれにすぐる喜びはない。

参 考 文 献

- (1) 岡村正明「救急車よりみた小児の事故について」(小児保健研究昭和四〇年二巻三号) 一一〇—一二〇頁
- (2) 高橋種昭「幼児の事故について」(小児保健研究昭和四〇年二巻三号) 一二六—一三一頁
- (3) 松本幸久「子どもに多い不慮の事故」(幼児の教育昭和三八年六二巻四号) 三二—三五頁
- (4) 松本幸久「都市と幼児の健康」(幼児の教育昭和三九年六三巻十一号) 十一—十六頁
- (5) 穴戸亮他「はしかワクチン」(日本医師会雑誌昭和四二年五七巻四号) 七九—一七九頁
- (6) 松本幸久他「幼稚園における健康教育の課題」(日本公衛誌昭和三七年九巻三号) 一〇五—一一〇頁
- (7) 大國真彦「肥満児の発見と対策」(学校保健研究昭和四一年八巻四号) 十一—十六頁

(お茶の水女子大学)

第十六回 幼稚園教育実際指導研究会

—幼稚園におけるのぞましい活動のあり方—

主催

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

協賛

お茶の水女子大学

教育研究室・児童研究室

附属小学校・中学校・高等学校

幼稚園教育要領改訂後、その線に沿った実践や研究が高まってきましたが、またそこにいろいろの問題点が生まれてきています。本研究会では恒例により本園における保育の実際を公開するとともに、ひきつづき新要領に沿った実践の途上におこる諸問題、特に園生活においてどのような活動をさせたらよいか、といったような問題を中心にして、教育課程に関する研究を深めることにいたしました。皆さまのご批評がえられれば幸甚に存じます。

なお「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づく特集としました。

日時 昭和四十二年六月一（木）二（金）三（土）日の三日間

会場 お茶の水女子大学講堂

講師

お茶の水女子大学教授
附属幼稚園長 坂元彦太郎

お茶の水女子大学助教授 松本幸久

日 程 表

6月3日 (土)	6月2日 (金)	6月1日 (木)	日 時	
実 際 指 導	実 際 指 導	受 付	9.00	
		開 会 の あ い さ つ	9.20	
		実 際 指 導	10.00	
			11.00	
協 議 会	昼 食	昼 食	12.00	
閉 会 の あ い さ つ			協 議 会	13.00
			講 演 松本助教授	14.00
			質 疑	15.00
	質 疑	質 疑	16.00	

実 際 指 導
会 員 幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者
会 費 三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）
申 込 期 限 五月二十五日までに「はがき」でお申し込み下さい。
申 込 場 所 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会
宿 泊 ご希望の方は五月二十日までに申し込み下さい。二食付一三〇〇円（サービス料を含む）ぐらいにてお世話をいたします。

○新刊「お茶の水女子大学附属幼稚園の一年―眼で見る教育課程」（創立九十周年記念として出版しました。本園における幼児の活動の写真集）本会会員に限り千円でお頒ちする予定。

お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

幼稚園四十年（六）

|| 昭和年代 ||

人形芝居の思い出

私が幼稚園に就職することになった大正十三年の三月頃、私は誰に聞いたのか、あるいは倉橋先生から見にこいといわれたのか、その辺のことはいま思い出そうとしても、いっこう記憶にないのだが、幼稚園（お茶の水附属幼稚園）に倉橋先生の演じられる人形芝居があるというのを聞いたので、ひとりで附属の幼稚園に行ってみたことがあった。行っただけで、すべては済んでしまって、人の集まりも、また使ったと思われる人形などの影もなく、空しく帰った記憶がある。だから倉橋先生所演の人形芝居は遂に見ずじまいであった。

私が人形芝居をはじめたのは、就職して二、三年ぐらい後の、日々の保育に少々ゆとりのできた昭和の初め頃だと思う。

菊池ふじの



人形芝居などというのには、あまりにもお粗末なものではあったが、自分で人形をつくったり人形芝居をする枠（つまり舞台）をこしらえたりして、何もかも自分で作り、自分で演じたのであった。子どもたちの歓声に力づけられ、はげまされて、引きつりこまれるように熱中していった。

人形芝居とはどういうものか、人のするのを見たこと聞いたこともない。その頃よその幼稚園でやっていたものかどうかなども考えたこともなかった。ただやりたくてやった、まったくの自己流でやったのであった。

舞台について

その当時は、幼稚園などで、人形芝居というものをやっていたものかどうか、そして、それに使う舞台などというものもあ

最初の手製の舞台（箱人形・布人形・土俗人形）



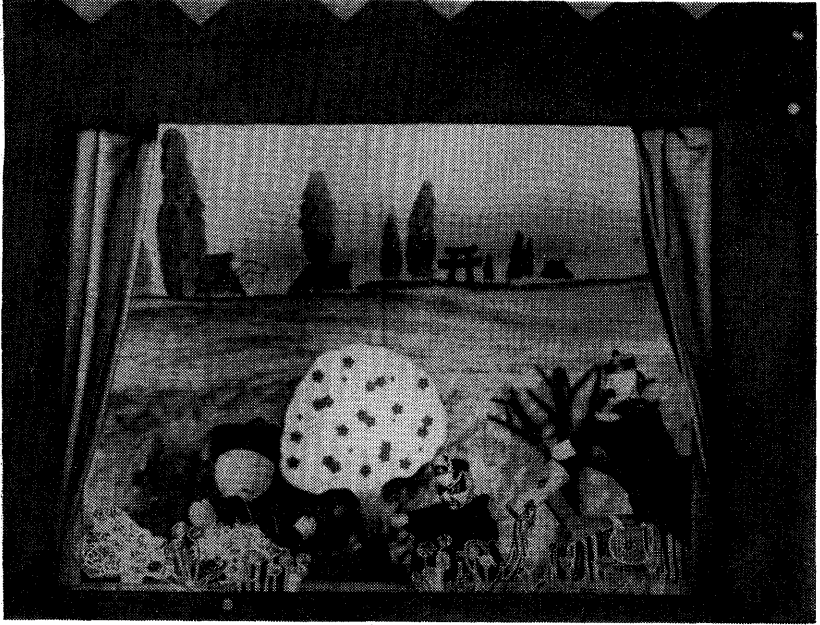
るものかどうか、人形も舞台も見当たらなかったといつていいであろう。しかもその頃は、関東大震災のあとで、一切のものが鳥有に帰したあとだからかも知れないが……。

私はそういう舞台があるかどうか、人に聞こうとも、また探そうともしなかった。買い求めるものなどとも思わないで、幼稚園の裏通りの本郷通りにある材木屋さんから、かんなんもかけていない荒けずりのままの巾三センチ、厚さ一センチぐらいの棒を買ってきて、自分で自己流の舞台をさっさと作った。床に立てるような大きなものは手におえないから、保育室においてある教師の教卓の上におく程度のものにした。

木目が荒けずりであるし、木の地色が白く見えるので舞台効果にも影響すると思ったので、木目かくしに黒のラシャ紙を貼ったりした。

それから舞台には幕が必要と考えた。両側に同時にさっと開くようにするにはどういうふうにしたらよいものかと、暫くは考えていたのであった。

ちょうどその当時、本校（女高師のこと）の講堂の正面壇上、中央の壁面には、御真影の奉安所があり、平素は固く閉ざされているが式の日には、式がはじまる前に事務長がうやうやしく登壇して、奉安所の幕の一方についている紐を引くと、幕はさっと両側に開いて、御真影が奉拜できるようになる装置になっていた。



そこで日頃はめったに近づくことのできない場所ではあったが、事務長に依頼してこの装置を研究させてもらい、これを真似して自作の舞台に取り付けた。紐を引くと思いだおりに幕が両側に開くようになったときは、くふうをしたり成就をしたり喜びをひとしお深く感じたものであった。

このような手製の、ごく粗末な舞台を使って人形芝居をしていくのをご覧になった倉橋先生は、あるとき

「フレイベル館を呼んで、人形芝居の舞台を作らせよう。だから、子どもが見るものとして、舞台の大ききとか、間口の高さや広さなど、どれぐらいが適当かを研究しておくように」とおっしゃった。

思いがけないお言葉にとでもうれしくなって、一生懸命に舞台の大ききや、間口の高さ広さなど研究し、フレイベル館に注文して作ったのが最初の舞台で、いまなお園の物置に残っている。

こうして舞台はできるし、人形も、それから脚本らしいものもどんどんできてきたので、人形芝居は盛んになってくる一方であった。その頃は子ども向きの映画などもちろん皆無、スライドも紙芝居であったから、子どもたちは先生の演じる人形芝居を、この上もなく喜び楽しんでくれた。このよろこぶ顔を見ると先生としますます意欲が湧いてきて、次には何をしようかと考えをこらすのであった。

はじめはひとりで演じていたが、次第に隣りの組の先生、またその隣りの組というふうに着同し、先生の方も二、三人で演じるようになり、観客も二組、三組、おしまいは全園児を遊戯室に集めてするようになった。

こうなってくると、第一回目の舞台に対して不足な点が出てきた。それは一つは、この舞台では狭くなってきた。二、三人の先生が舞台の中に入って、しかもそちこちと動きまわらなければならぬので、とても狭くなってきた。

それから、家とか木とかその他の小道具を置く台の用をなすものが、舞台の間口の方にも奥の背景を貼るあたりにも欲しいと思うようになってきた。同時に、この台の直ぐ下部あたりに、取り替えの人形や小道具などを置く棚もあればなお結構ということが感じられてきた。

それから、浦島さんの人形芝居をやる時など、鯛や平目の行き交う海の中を、亀にのった浦島さんを進ませるとき、背景をまわるようにできるといいなと思い、それには背景を巻ける仕掛にすると、この望みが実現できると考えた。

それから、舞台の中に入って演じているとき、熱中してくれる小さい観客の表情や様子が見たいものだ。見ることによって、いっそうファイトも湧いてくるので。それには、舞台の間口の下あたりに、のぞき穴をつけるとよい。そしてこののぞき穴は、お客さんからはわからないように、といったような、不

足点が考えられてきた。

そこで、以上の四つの点、即ち「狭い」、「小道具置き棚が欲しい」、「背景をまわるようにしたい」、「のぞき穴が欲しい」の希望を入れた第二代目の舞台をやはりフリーベル館に注文して作った。この舞台もいまだに残っていて時々使用している。

現代は、幼児向きの映画もたくさんあるし、幻灯、紙芝居、テレビ（カラーテレビも）ラジオなど、子どもたちの喜び楽しむものが昔とは比べものにならないほど潤沢になってきたので、園などで人形芝居を演じることは、稀になってきているようである。しかも一方ではバベット劇団とか、ブークとか木馬座など、いわば人形芝居の専門的なものが出現してきて、照明、音楽などを加えての精巧な演出をし、子どもたちを芸術的に酔わせている。

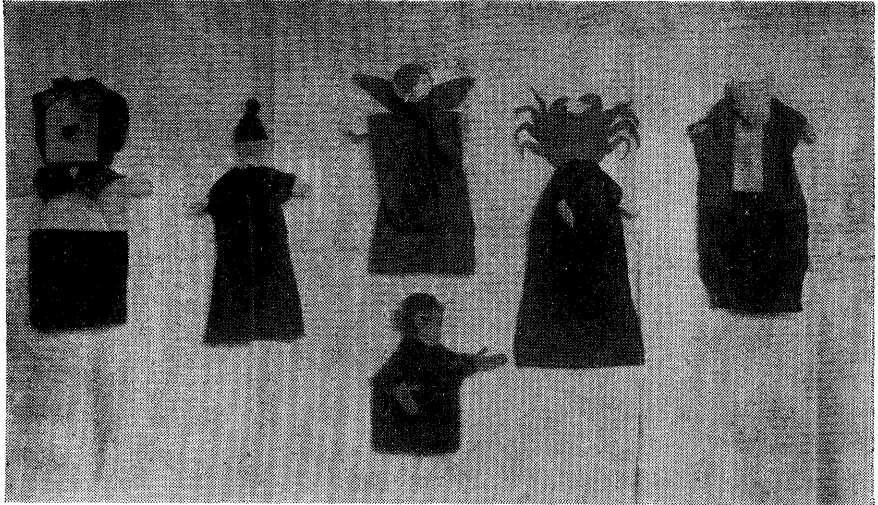
人形について

「人形芝居に使う人形の、表情や衣裳は、繊細なものよりはごく大まかで印象的なものがよい」と、いつか倉橋先生がおっしゃった。

このお話を伺ったとき、それならば、その人形は私たちにも作れそうだと感じた。

小箱の人形

そこで最初は、小さい箱を顔にした小箱の人形を作った。



人形のいろいろ 左から箱人形・卵人形・木の人形・画用紙でつくった人形(かに)・布でつくった人形(ぶた)・土俗人形(さる)

これはあり合わせの小箱に、大まかに目やまゆ毛を書き入れ、鼻は、その当時手技の材料としてよく使ったきびがらのあるあたりへ挿し込んだり、あるいは貼りつけたりして鼻とした。またときには、画用紙で細長い立体的な三角をつくって鼻として貼ったりしたこともあった。頭は、茶や黒の毛糸などをふきふきとつけて髪の毛とした。

このようにして頭や顔の部分ができあがると、次には、四センチぐらいの長さの画用紙を指がはいるぐらいの中穴にして二重や三重に巻き、これをとけないようにのりで貼りつけて頸をつくり、ここへ両手をつけた着物を縫いつけて、ギニョール式の指使い人形をつくりあげたのである。

着物の色合や柄模様、髪の毛や顔の表情などで、男女や年齢などの区別はほぼ判別できるようにした。

卵人形

その頃の一夏を房州の興津で過ごしたことがあった。砂浜にはいろいろな貝が落ちていたが、その中に角のような形の細長い貝があった。これも珍しくて拾えるだけ拾ってくるのであったが、こうして見ているうちに、この角貝は、何かになりそうだと思われてきた。

そうだ、卵の中味を吸って空にし、この殻に角貝を二本つけたら山羊の顔になるのではなからうかと思われ出した。そこで卵の一端に上手に小さい穴をあけ、ここから中の白味や黄味を

吸い出して中を空にした。このままの卵の殻では、さわればすぐ割れてしまうほどにもろいから、どうかしてもう少しよいにしようとかうふうしたり、本をあさったりした。そのうちに、「かんぴ」という、日本紙をつるつるにしたような質の丈夫な紙のあることを思い出し、これを半センチ幅ぐらいの細いものに切り、これを中の穴になった卵の殻の外側に、幾重にも貼り重ねてみたら丈夫になるのではなからうかと考えついて早速やってみた。なるほど相当に丈夫になり、はらはらしなくてもよくいくらい強くなったので、この卵人形で、七匹の子山羊の人形芝居をしたものであった。

布人形

これは布を縫い合わせて顔をつくり、目、鼻など刺繡でもって表わした。布も、麻の入ったものになると、毛ばたたなくて、しばらくはきれいに使える。またメリンスの布などで豚の顔をつくり、前に述べたような方式で体をつくって、三匹の仔豚の人形芝居をしたことであつた。

木の人形

その頃は街の裏通りには下駄屋さんというのがあつて、そこのご主人は厚地の前掛けをし、店先きで下駄造りをしていたものであつた。下駄造りも、原木を大まかに下駄の大ききぐらゐに切つて高く積み重ねておき、それを暇にまかせては一足ずつこまかく削つて下駄にし売るようにしていたようであつた。

私はこの下駄屋さんへ行つて、くずの端木をもらい（下駄屋さんには、ただでくれた）これを切り出し小刀で人形の顔のように細工して人形を作つたものであつた。下駄屋さんからもらうのは桐の木であるから、やわらかいので、私どもでも小刀で細工ができた。全体の中で鼻を浮き出すことはいくら細工がし易いといつても相当な労力や時日が必要なもので、私は顔の形だけを細工し、鼻は小さい木端を鼻の形に細工して、ばんじゃくのりで貼りつけて鼻にした。

それから、その頃フレール館で売つていたおままご道具の中のお鍋、取手のつるのついている木の鍋をこの人形にかぶせて落ちないように止め、鍋の帽子をエナメルで黄色に塗つたら、ちょうど鉄かぶとをかぶつた兵隊さんができた。この兵隊さんに着せる服は、九段の僧行社へ行つて、カーキ色の軍服布を買ひ求めた。それから玩具の機関銃を求めて、「爆弾三勇士」の人形芝居をしたことも、今なおありありと記憶に浮かんできている。これは支那事変がはじまつた後のことであるから、昭和十四、五年頃のことであらうか。

その後この桐の木でつくつた兵隊さんを使って、戦争たけなわの頃、「出征」という人形芝居をしたこともあつた。

新聞粘土の人形

支那事変がはじまつてから、しばらくたつてからのことだと思ふ。いろいろの物資を生かして使おうという気運が国内に盛

り上がってきた頃、幼稚園でも廃物とまではいかなくとも、物を粗末にしたりしないように、また死蔵してあるものを生かそうという気がまえが人々の心の中に起こってきた。

この頃である、立体的なものをつくるのに、粘土では価格が相当高い、作ったものは重い上にこわれ易いなどの欠点があるというところで、新聞粘土というのがはやりだした。新聞は戦争になってもどこの家にも豊富にあるものだし、これを生かそう、という主旨もあつたらう。

これは、新聞紙を細かくちぎってしばらく水に浸し、紙の繊維が崩れるようになったころ、火にかけてかきまわしてどろどろにする。そして相当やわらかにどろどろになった頃にしばらく、これにふのりを火にかけて溶いたものを、絞った新聞粘土に入れてよく混ぜ、これを固めて任意の形のものを作り、これを太陽、あるいは火気に乾し、乾いたところで下地として白の泥絵具を塗り、乾いたらそれぞれの色の絵具で上塗りをして出来上がりとするのである。一時この方式で人形を作り、人形芝居に用いたものである。乾燥すると割合に軽いし、落としてもこわれないので重宝であつた。しかし、この新聞粘土は、ぼそぼそしているので繊維を必要とする作品には不向きである。

おままごとに使う野菜類（かぼちゃ、きゅうり、茄子、人参）菓子、おすし、ランチ、サンドイッチその他果物（みかん、りんご）、ぶどう、梨、柿、栗、メロン）などを、子どもたちと共

にこの新聞粘土でつくり、採色してままごとによく使つたものであつたが、最近では保育用品のお店がこういう子どもの施設に用いられるような品物を、プラスチックなどで精巧に作つて販売しているので、苦勞なしに手に入れられるようになっていく。

以上述べたように、いろいろの面にわたつて、手きぐりで自分たちで作つて、人形芝居に使つたものであつた。

その後保育用品店やその他こういう仕事をすると、幼稚園や保育所では、人形芝居に用いる人形が必要であることを認識したようので、いろいろの種類の人形の頭を、一個五十円とか八十円とかの値段で市販するようになった。

脚本について

はじめの頃は脚本などはなくて、独り語りといつたようなものだった。

次の段階として、二、三人で演ずるようになって、前にかまかな打ち合わせはしておくが脚本なしで、教師めいめいが、その場に應じたセリフをいつていたのであつた。大体はスムーズにいつたものであつたが、時としては、セリフの発言が重なつたり、とんちんかんなことになつたりすることがあつたりして、舞台の中にもぐつていた教師同士がおかしくなつてしまつ

て笑いがとまらなくなることがよくあったものである。すると真剣に見てくれる大向うの小さい観客さんたちから、「先生、笑っちゃ駄目だよ!!」と訴えられること屢々であった。

そこでやはり一定のセリフをきめておいて、それに忠実にしたがっていうようにしなければいけないということを思うようになってきた。

それから、一つのだしものに対しては、曲りなりにもセリフを書いておき、出演前によく読んでおくことにした。

こんなふうにして、次々と私的な脚本をこしらえて人形芝居を上演していたものである。

するとあるとき倉橋先生は、今までやったものをまとめて、人形芝居の脚本集を出版したらよい、とおっしゃった。

そこで、今まで人形芝居の仮の脚本をやっていたのが、同僚の徳久孝さんと私だったので、各々がまとめて協同出版した。

もちろん全部倉橋先生のお取りなしで出版になったことはいまでもない。昭和五年七月のことである。

序文に、「菊池さんも徳久さんももちろんシェイクスピアのような大劇作家ではない。ただの幼稚園の教師に過ぎない。しかし、幼稚園の人形芝居には、程よきまずさというものが必要だ。そのまずさをこの二人はもっている。」

という意味のことを書いて下さった。ほめられたのか、くさされたのかちょっとわからないけれど、自分の書いたものが徳

久さんと協同でやったものではあったけれど、一冊の本になったということに非常な喜びを感じたものだった。自分のこの上もない記念物であるのにその初版がいまは手許にもない。一冊五十銭定価のものでフレール館出版、倉橋惣三監修保育叢書の中の一部であった。

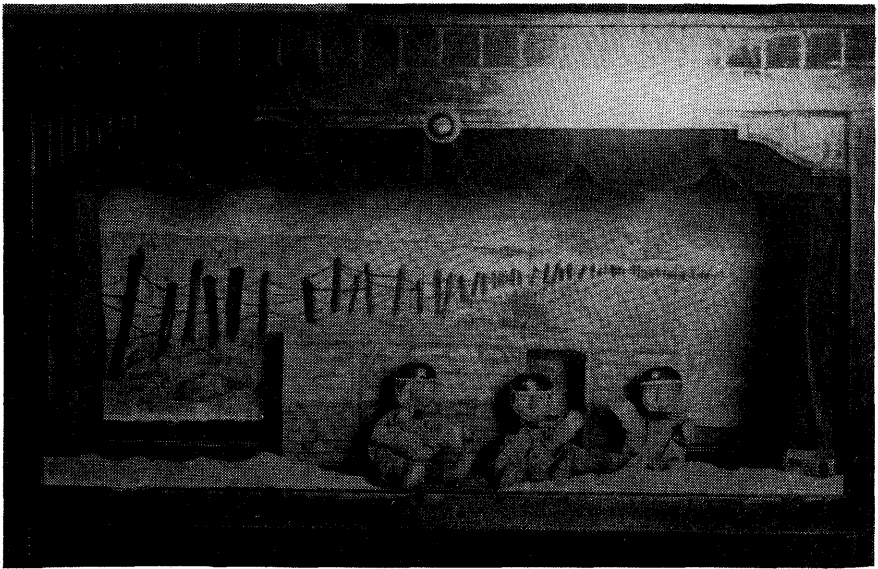
その後大東亜戦争が終わり、再び幼稚園が再開されるようになったとき、倉橋先生から、

「また人形芝居脚本集を再発行しよう」と申し渡された。徳久さんと二人で以前のを改訂増補した。このとき、倉橋先生から「前のおりでなく、怠らずにいつの間にか積み重ねておいて、増補ということにしたことは感心だ」とお褒めを頂いたのをいまもってはっきりおぼえている。

いまふり返ってみて、この人形芝居については、いろいろの楽しい思い出がある。

園児たちに見せることは第一の楽しみであり、また人形芝居をすることの本命でもあるが、その他に、同じ学校内の附属の小学校との職員同士の懇親会にも演じたものだった。この人形芝居の一座は「お茶の水座」という名称をつけていた。倉橋座がしらから、私はふじの丈という芸名、同僚の徳久さんは孝之丞、同じく同僚の小島その子（今は宮崎その）さんはその八という芸名。そして上演の日には倉橋先生独特の字体で、細長い障子紙のような和紙に、これらの芸名が舞台の前方に貼り出さ

改良を加えた二代目の舞台・爆弾三勇士（兵隊は手づくりの木の人形）



れている。上演中、時折り小学校の先生方から、大向うよろしくのかけ声をいただいて、なおいっそう張り切るのだった。

またその当時は、夏季講習会の講師陣にわれわれ現場の者も一人か二人ぐらい加わらせるのが常であった。ある年は私に人形芝居の脚本化というようなことで講師になれという命令が降った。いやなことだったのだが、そう反抗もしないで、あの七月末の暑い日を憂うつの中にこの命を果たしたものだ。これも今となっては楽しい思い出の一つである。

さてこの人形芝居についての講習の際、その後篇として、実演をすることになった。ちょうど昭和七年の七月であった。その頃は、大東亜戦の前の支那事変当時で、私はちょうど爆弾三勇士の脚本を考えていたときだった。脚本の製作に当たっては先ず、事実を究めなければならない。そこで、神田の東京堂や三省堂の店頭でこの事実を究め、生命を鴻毛の軽きに比して出陣する勇士の心の中を思っ涙とどめあえず、という心境でこの三勇士の脚本を書き上げた。これを実演するについての練習のときは倉橋監督も舞台裏にもぐりこまれて指揮指導して下さった。アイスクリームを注文して届けさせては私たち出演者を励ましたり叱ったりなされた。

倉橋先生は一年志願兵の陸軍少尉だったので、軍記ものの指導には熱がこもり、また当を得たものだった。敬礼の仕方、報告や復誦の仕方などまさに堂に入っていた。その

ときのことである。三人の勇士が爆弾を詰めた筒を持って敵の鉄条網へ飛びこんで爆破し、通路を開き、そのおかげで味方の軍が敵陣に攻めこんで勝利をおさめるのであるが、この鉄条網へ飛び込むとき三勇士が「天皇陛下万歳!!」と叫び、とび込むのであるが、その万才!のセリフが、私たちの、あまり淡々として感動がこもっていない。こういうふうにいわなければ、とおっしゃって、ご自分で、「ばん ぎーい!!」と必死の声を張りあげて師範して下さった。あの声やご様子がいまでも目に浮かんでくる。これに対して、私はこんなお返事をした。

「先生!あそこは、悲しくて悲しくてとても先生のようにはいえないんです。あそこは、溢れる涙をこらえながら書いたとこなんです。先生のように感慨こめていったら、泣けてしまっ
て声が出なくなるんです。」

「ああそうか!」と先生も感じていらした様子だった。

× × ×

徳久さんと私の共著なる「人形芝居脚本集」の改訂増補(昭和二十五年七月発行)にいただいた倉橋先生の序文をいま改めて読み返してみたのであるが、先生の人形芝居に対してのお考えや、幼稚園教育要領の誕生後においても、益々自信をもってこれが幼稚園に取り入れられるべきを説かれている点など先生の気持ちやあの当時のことがわかるし、先生の文章は、読む人を努力なしに引きずりこむ魅力をもっているので、次に全文を

かかげさせていただくことにする。

初版にいただいた文章もいいものだったように思うが、いまはそれが無くなってしまっているのだ。……

菊池ふじの 孝著 人形芝居脚本集
徳久

序

本書の著者である菊池さんと徳久さんが、人形芝居の脚本というものを書きだしたのは、大正の末からの古いことである。ちょうどその頃、わたしは幼稚園に指使い人形芝居をとり入れようとして、小さな舞台で幼児たちをよろこばせ始めていた。今から思うと余り簡単なものだったが、こういう試みの多分最初のものであり、少なくとも、当時の幼稚園のきまりきった型をやわらげた効はあったと思う。それが趣旨でもあったのである。実はその以前からこの考えをもっていたが、あやつり式は、ちょっとむずかしいし、文楽式は大きかりだし、といって頭と手足位は動かないとおもしろくない。そこで昔から土俗玩具にある首人形へ目をつけて、それに外国でみて来た例を加えて工夫した。そうして、お茶の水人形座の看板をかけて毎夏の保育講習会にまでもちだした。やがて自分は舞台監督の方になって、実演は先生方に譲ったから、さすがにその方がうまい。なかにも本家出藍の評判の高かったのが、菊・徳の両ハナガタであった。

そのうち、急速に保育界にひろがって脚本集の注文がおこり、実演者兼座付作者として書きおろして貰ったのが、両ハナガタ著作の旧版、「人形芝居脚本集」であった。これまた大うけで、先ず人形芝居のシナリオの定本ということになった。それを増補改訂したのが此の本である。その後新しいいいシナリオの次々に出たことを喜ぶとともに、なまかうちでは家元版として、近松、竹田、シェイクスピアに列べて自讃している。

人形芝居の保育価値については、今日ではもう説明する必要もない。舞台の前に集まる可愛い幼児たちの輝やく目を見ただけで、それははつきりしている。ただ新版御披露の口上のついでに、お茶の水座伝統の芸風とでもいうところを、二、三申し述べてみよう。

その一、幼稚園の人形芝居は、どこまでもマジメのものであること。決して余興でも遊芸でもない。昔流の保育項目ではないが、新保育要領でれっきとした保育内容の一つになっている。筋も演出も、戯れのじょうだん半分であってはならない。

その二、演出は十分気を入れ、観せる前に一応の稽古もいること。その場の即興で、口から出まかせ、指の動き放題といったふうのことは以ってのほかである。型のきまった歌舞伎というわけではないが、少なくとも一つの筋はいつも変わらぬ演出であってほしい。

その三、わるふざけは禁もつのこと。喜劇もよしユーモアも

大切だが、前うけ一方の茶番狂言は厳禁である。子どもなりにいろいろの情緒をはたらかせるのが劇の特色なのに、げらげら笑いだけは愚劇であり、子どもをも愚にする。

その四、お談義はなおさら禁もつのこと。劇は観賞させるべきもの、興味に楽しませるものである。教えられたり訓されたりにしているとあらわに気がついては観劇の味はなくなる。人形の芸によって感ずべきところは感じさせられ、意識の奥で考えさせられているのに、ベシ、ベカラズではつきりさせられては興がさめる。

その五、すべてあっさり運ぶこと、折角人形がしぐさをし、せりふをいい、小さい観客が活発な想像をはたらかせているのに、その上に説明をしたり、注釈を加えたり、甚しいのは舞台の下から演出者の感想が飛びだしたり、そういう余計の挿入物は余計であり、邪魔である。幕がしまってからまで、あれこれの結論は一層迷惑である。

最後にもう一つ何より一番大切なのは、演出者が先ず劇中の心になりきらなくてはならぬということ、それには、自ら興に乗らなかつたり舞台裏に入ってから脚本を辿り辿り演出するといったようなことでは、人形は決して活きない。

どうぞ、この脚本集が真に人形を活かすために用いられんことを。
昭和二十五年七月

倉橋惣三記

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

幼児の活動の観察

津守 きょうは、幼稚園における幼児の活動がどのような意味をもつかを考えるために、ここにお集まりの方々に、午前中付属

幼稚園で観察していただきました。ここで観察された具体的な

「活動の例を中心にして、それがどういう意味を持つか」ということを考えたいと思います。大きくわけて二つのことが考えられると思います。

一つは、教育的ということばに問題があると思いますが、子どもの活動にどのような教育的価値があるかというのとらえ方、そしてもう一つはそれが子どもにとって、どういう意味をもっているかというのとらえ方です。具体的な例をあげていただき、他の方たちにも意見をいただいで進めていきたいと思ひます。

司 会 津 守 真

出席者

O (大学院学生)
 Y 先生 (幼稚園教諭)
 M 先生 (幼稚園教諭)
 I (研 究 員)
 T 先生 (幼稚園教諭)
 A・B・C (実 習 生)

○製作活動の中で

津守 私のみていたのは、四歳児のクラスです。部屋の中で七、

八人の子どもが製作をしていました。その中の一人、Kちゃん
 が画用紙を丸めてセロテープでつけ、筒っぽを造っています。

先の方にハサミのきざみをつけるのと先生のところへいき、「こ
 どうやったらいいの」などいろいろ話しかけ、また机のどこ
 ろにもどってきてセロテープではりつけ、先生のところにまた
 持っていく。一段階すむと先生のところに持っていく、先生も
 余りたくさんのことをいつているのではないのですが、また一
 段階できると先生のところに持っていくます。

何か自分で考えて造っているのですが、その途中途中で先生

に確認してもらいたいのですね。先生が何かいうと満足して製作活動を続けるのです。だんだん造っているものがロケットだということがわかってきました。「ほら、本物になるからね」と、自分で考えたものを紙でこしらえようとしています。新しい考えがでて、自分で切ったりはりする必要なのですが、それを実行する途中途中の段階でやはり先生の助けを必要としているのですね。助けといっても、ただ先生に確認してもらえばいいというだけなのですが。

○ 子どもが何か造るといふ時、何か自分でおもしろいことを思いつき、発見し、実行にうつす、そこで先生がちょっと確認しあげると、そういうちょっとしたことで子どもの創造性が伸びていくのだといえるわけですね。

津守 ええ。そのあと私をつかまえて「おじちゃん、何しているの？ 堀合先生ね、頭は心配しないでね、メガネだけ心配しているんだよ」ということをいうのですね。私は最初のうち何をいっているのかわからなかったのですが、堀合先生のとこに自分の造ったものをもっていくと一緒に考えて、頭を使ってくれらるということが、子どもには、メガネがキラキラ光っているようにみえて、こういうことばがでてきたのではないかと思うたのです。先生に確認されたという感情がこういう形ででてくるのかなと思った例です。

Y そのKちゃんという子はなかなかせん細な神経をもった子ですね。

津守 受け持ちの先生もそのようにいってましたね。

ここで子どもの造るといふことを題材にしているのですが、他に造るといふことの記録がありますか。

A 三歳児ですが、明日かあさって大きい組でお店ごっこをします。その時買物をするためにさいふを造ることになり、関先生が材料など用意し、私も手伝っておりました。ある子どもが「先生、造って、造って」というのですね。「一人で造れるでしょ」といっても「造って、造って」といってきます。最初あまえていふのかなと思ったのですが、よく聞いてみると「僕が造るとへんになっちゃうからいやだ」といいます。「へんになってもいいのよ」といってもどうしても承知しません。お金を描く時でも、他の子は紙にすぐ円を描くのですが、その子はボタンを使って円を描くのです。型のきれいなものしか造れないというか、安心してできないというふうですが見られます。

ここの幼稚園では、子どもの自由表現が重んじられていますから、ほとんどの子どもが自由に伸び伸びといますが、その子どもだけ何かちょっと自分の思うようにくふうができません、型にとらわれるようなふうが見えました。

M その子の家庭に何か問題があるのではないのでしょうか。例え

ばその子の母親が「こんな絵はだめ！ちゃんとした絵を描きなさい」とか「兄の方が上手でその子は上手でない」というように。

津守 なるほど、僕はできないと思ってしまう場合ですね。

「この幼稚園の製作を見ていると、自分で思ったものを何とか形にするというそのところの努力に重点がおかれていますね。私がみていた組が、あなたがいわれた明日かあさってやってくる組ですね。きつと造っている場面がきつき私のあげたKちゃんの例ですね。

T 五歳の組でも製作をしていました。女の子が一枚の画用紙で立体的なお菓子をを入れる家を造っていました。四角い家の形にし、山形の屋根がふたになるように造っているのです。それを造りおえた時、村井先生がそこをうまくとりあげて、この子はこういういい考えをしている、というそのくふう点を囲りにいた子にみせてあげています。囲りにいた子どもたちも、うなずきながら真剣にみているのです。

津守 こういうことを皆に話すということはその子が考えついたいいことを認めてあげて、引き立ててあげるということですね。

T ええ、それにでき上がった結果だけではなく、努力して考えている子ども自身のそういう姿勢を伸ばそうとなさっているように思いました。

津守 製作というものの中で、ただ技術というだけでなく、子ども

の新しい考えが伸びていくのですね。そして自分で考えたものを実現したいと努力がはられるわけですね。

Aさんのだされたのは、そこに入って自分のものを実現していくという段階にいかずにそこでチェックされて、さまたげられる状態ですね。Oさんの例の中に子どものお話の中にお母さんの考え方が反映されているのがありましたね。

O はい、男の子が一人庭にベタンと腰をおろし、足をなげだして、小さい石を拾っています。そばでもう一人の男の子が立ってみているので、すわっている子が「○○ちゃんしようよ」というと「僕ママにおこれちゃった」というんです。「何おこられたの」とその子がききかえますと「この前、それをしてマラにしかられちゃったんだよ」という会話を聞きました。その子はやりたいのだけど、ママのいったことが気になるのです。

B 四歳児のクラスで、一週間ほど前から動物園造りをしています。来週そうそうお客さまを招いて動物園を開こうという予定なのです。あき箱やストローなどを使って立体的な動物が次々にでき上がっていくのですが、ある女の子が、こんなに日数がかかっても、造っていい時間がこんなにあったのに、まだ一つも動物を造っていないのです。その子はとてもおとなしくて、幼稚園が終わるとあの子は今日何をしていただろうかと考え

せられるような子なのです。

その子がやっと昨日から小鳥を造りはじめました。その小鳥といっても他の子なら立体的な箱など使って、色をつけたり、いろいろくふうするのですが、その子はただ画用紙に絵をかいてそれを切ってはりあわせるだけなのです。昨日は失敗して、今日やっと一羽かいて、一色いろをぬって、しかも一日がかりなんです。先生に「何を造ったの？ 造らなかつたの？」と聞かれ、昨日からとりかかり、二日かかってやっと小鳥一羽を造ったということで、こういう子はここの幼稚園では、珍しいのですね。ということで印象に残りました。

津守 それだけに貴重な小鳥ですね。自分から造りはじめたのですか。

B はっきりわかりませんが、隣りでおしゃべりの女の子が、小鳥を大きわざして造りはじめたので、何らかの影響はうけたでしょうね。

津守 それについてどういうふう考えたらいですか。

O 昨日は失敗しても、今日またはじめたということに意義があると思います。子どもの中では気持ちのつながりがあったと思うのですよ。

津守 やいやいやいわれたのではなく、ながい時間かかって、自分でそういう気持ちが出てきたのでしょうか。

B 先生はあまり強制なさいませんからそうだと思いますが、他の子はもうたくさん造っているのに、そういう気持ちになるまでに非常に時間がかかるということそのことを大事にみてあげなければいけないーと思いました。

○そのものになる経験

津守 紙製作ということからここまでできましたから話題をかえて、ここで他の場面にいってみましょう。部屋の中の活動で何かありますか。

Y 三歳なのですが、部屋でプラスチックの棒で床に大きな輪を造ったり、一か所積木がつんであり、その中が海か池のつもりで積木からとびこんだり、泳いだりして、その中で遊んでいました。前から続いていたのですが、木の棒をおき、さめにし、さめだ、さめだといって輪の中を走りまわります。そうすると輪がこわれ、さめがにげます。また輪にしてそこが海だという遊びをしていました。三歳ですからそれほど長く続かず、それぞれがバラバラにちがう方へ散ってしまうのですが、その場所にもどつてくるとそのさめの話が続いていくのです。

津守 どれくらいの人数ですか。

Y 男の子が三人、女の子が二人でさわぎまわるということを楽しんでいました。バラバラになるのですが、もどつてくる

とサメをばらまいて続くのです。

津守 それはよくあるような遊びのはしっこみたいなものですね。それをみていてどういう意味を考えましたか。

Y ふざけて楽しいということが子どもの一番楽しんでいることだろうとみていました。

津守 ふざけて楽しいということですが、それはどういう意味をもつのでしょうかね。

Y 友だち同士の交わりができる、一緒になってキャーといつて手をつないだりする、一つのことで気持ちが一緒になるっていうのですか、そういう楽しさがあると思いますが。

津守 つまり、ふざけて皆でワーツと発散させる、外にエネルギーが向かう、それが友だちを結びあわせる力になったりすると理解していいですか。

Y エエ、そうですね。ですからどれだけあの子たちがサメを理解して、皆がサメにたべられるとかいうのではなく、雰囲気の中でサメを想像しているのです。

津守 そうですね、そういう例というのは、おそらくずい分たくさんあると思いますね。そんなことでもう少しつけ加えてみてくれませんか。

C 三歳児のクラスですが、おひなまつりの時、大きいクラスの劇の中にチョウチョがでてきました。それをおぼえていたらし

く、次の日にチョウチョウを造るといいだし薄い紙にマジックで描いてチョウウを造り、皆でチョウウになって遊んでいました。それをあとで先生がリズムの時に利用したこともあってか、造っていなかった男の子も次の日に自分たちから自由に造りはじめます。次の日も、次の日も、朝くると男の子も女の子も「チョウチョつけて」といって、つけてもらうと遊戯室にいき、走りまわってきたり、お部屋で走りまわっています。それはただ単にチョウウをつけているというだけで、走りまわってよろこんでいるのです。

津守 なるほどね。チョウチョを背中につけるといっただけで、自分がチョウウになってしまうのかしら。

C ええ、先生が「アラ、朝早いチョウチョさんが生まれましたよ」というと「キャア、キャア」といって机のまわりをはしりまわっています。男の子たちも即席で、模様もない、セロテープがべたべたとくっつけているのもよるこんでチョウチョになりきっているのです。

津守 おもしろいですね。チョウウをつけるといっただけで、そういうふうに分がチョウウになってしまうわけですね。

T 五歳の男の子。外のスベリ台のあたりで、坂のトンネルがあるところですよ。七、八人がバドミントンのバットを小わきにかかえてババババンとうちあいをしています。コンクリの坂の

一番上でうたれると、泥まみれになって、下までころがって死んだように動かない。下の方にいる子は上の子を、上にいる子は下の方の子をと、構えてうち、うたれる、うたれるとそれれけがをしたり、死んだりの表現をして、またおきあがりうちあい、たおれるといった活動をしていました。ようすをよくみても敵、味方だとか、悪いやつをやっつけるとかいうのではなく、ただバドミントンのバットを構えてやたらにうっているのです。トンネルの上からとびおり、ころがり、友だちとぶつかり重なつて、泥まみれになって一人一人が全身で楽しんでるのですね。そして五歳の男の子の活動量の大きいのは驚きました。

津守 そのものになりきっているわけですね。

○ そのものになってしまふという例で、三歳の子どもですが、遊戯室の網のところで、何人かの子どもが遊んでいました。一人の男の子がホッピング板を裏がえして、組木のバーベル状のものをもつてきて、それをホッピングの中に入れ、ハンドルがわりにして、自動車みたいに動かしていました。そのうち網のところで大勢の子どもが遊んでいるのをみて、ホッピングをひきずって網のところにもつていき「入れて」といいます。網のところにはいた子どもたちは、特別まとまった遊びをしていたわけではないのですが、その子はそこに入ったつもりになりま

す。そして相変わらず運転をしています。そのうちいつのまにか船長さんになり、「僕、船長さん、船長さん」といいますが、他の子はわりあいキョトンとした顔をしています。本人はハンドルを動かす動作をしながら「沈没しそうだ」とか「船が駅につきます」とかいつていますが、一向に駅につくようすも、沈没する気配もないのですね。自分でいつて、それにひたりきっているのです。一人の子どもが偶然運転している前に立ちふさがったのです。すると「あつ、ウルトラマンだ」といいます。いわれた子は最初そういうつもりはなかったのですが、そこでそうなつてしまふのですね。ウルトラマンのような格好をして向かってくる。船長さんが「こっちじゃなくてあっちだ」と前方の箱つみ木の方を指さすと、ウルトラマンのようすをしなから箱つみ木の方に向かつていつて箱つみ木を押ししたりします。子どもの中でどんどんイマー・ジェネーションが展開して、ここに入つてなかつた全然関係のない子どもでもちよつとしたきつかけで何の抵抗もなく入つて進んでいかれるのですね。外からみていると子どもの中の動きというのがどういふふうになつているのかなど興味深く感じたのですよ。

津守 そうですね。そういうことは実に多いですね。そして物になつてしまふというところ、自分に自分がそのものを理解する、外側から理解するのではなくて、そのものの意味というも

の子どもが子ども自身でつかみとるといふ大変大事なものが
あるように思いますね。

○うまく遊べた経験、うまく遊べなかった経験

津守 それではこの辺で他の例に移りましょうか、Mさん何かありますか。

M 四歳の子でも、砂場で二、三のグループが遊んでいました。一人遊びをしている子がシャモジをいっぱい砂の中にさしていました。別の子がそこにきて、「シャベル下さい」「いっつ」「いっつ」、横にいた女の子がきて、「シャベル下さい」「はい」女の子「いくらですか」「10円です」女の子がお金をわたすまねをしますと、今度はさっきの子にお金をもらわなかったものですから、その子のところにいき「50円下さい。50円下さい」といいにいきます。その遊びはそこでおしまいなのですが、シャモジの男の子は「いくら」といった女の子のグループに入り、一緒に遊ぶ方向へ発展していくのです。

その子も、もし機会があれば、もっと早く一緒に遊びたかったのではないかと思いました。

津守 ほんのちょっとしたチャンスで一緒に遊ぶことができるという例ですね。この場合きっかけというのは偶然にと考えていいのかしら。

M ええそうですね。そのいった方の女の子にしても、別にその子をきそう気があったわけではないのですが、自分がシャベル屋さんとして認めてもらったということから、その中に入っていたのではないかと思います。

津守 なるほど、やはりそこで認められたということですね。

M ええ、自分の存在を認めてくれたということが、その男の子をひき入れたのではないかと思います。

C 私はその逆の例で困ってしまったのですが、女の子が一對六でけんかをはじめ、私が原因を聞きにいったときに、その一人が「ピアノの練習が今日だ」というのに他の六人が「明日だ」ということで一對六になっていました。一人の子もぜったいにいいはるし、六人の方もいいはるので、私はどうしていいかわからなくなっていましたところに村田先生がいらっしやり、原因を聞いたりしていますと、その一人の子がおもちゃを一人じめにしたということでした。村田先生は「いじわるをしてはいけない、皆はおながすいていじわる虫の子があげられて……」と皆を笑わしておわりにしたのですが、最初はちょっとしたことがどんどん波及して大きくなってしまおうのですね。

津守 最初はものとりあいから、ピアノのレッスンのいいあいになるのですね。そこで、けんかまでに波及し、そういう感情が長びいたということは、子どもとして学ぶところがあつた

と考えていいのかしら。

C その場面では一人の方の子は、すわりこみ、他の六人はチョウをつけていて、飛んでいって帰ってきて「明日だ」といっては飛んでいくというふうな、六人の方は遊びにつながる、何か楽しんでるといった感じがしました。

津守 そういうことは幼稚園の中では当然、起こることでしょうね。そうやって社会生活の不安というのも一人の方の子は学んでいくのでしょうか。(笑)

C その子が偶然気の強い子で、あくまでいいはっていたので、余計長びいたと思います。

津守 なるほどね。その子にしてみれば、他の子に同調しないで、自分であくまでも自己を、初心をつらぬいたという経験をしたわけですね。他の六人も皆が皆同じ気持ちだったということは、あやしいものです。

C 一人の子に他の子によってするということがらしいですよ。

津守 一人の子にしてみれば、大変よい経験だったということがいえるかもしれません。

これも生活の中の一コマであり、そういう中に案外非常に大きな教育の場というものが、教育されている場というふうなものがあるように思うのですが、どうなのでしょうね。

I 私の例もそのたぐいかと思いますが、大きい組の女の子がブ

ランコで三人、鉄棒で二人、お互いに声をかけあいながら、遊んでいました。そのうちブランコをしていた女の子が「皆でブランコを横に次々に移っていきこう」と提案したのです。すると五人がバツと一緒に、あらそってジャンケンまでして順番をきめ、並びました。提案した人が一番先に動きはじめ、皆それを見ていたのですがあまり興味がのらないらしく、隣の方をみたりしています。やりはじめた子も段々動作がゆっくりになり、ほとんどその遊びが中止された形になり、他の子はなにもやらずに終わってしまうのです。提案したときには、皆がとびついてきた、その喜びに比べると全然遊ばなかったというのが印象に残りました。

津守 いきおいよくはじめるのだけれども、うまくいかなかった例ですね。みていてどうしてだと思いましたが。

I わからなかったのですが、となりで男の子たちがブランコをしていたので、そっちの方がおもしろそうにみえたのかと思います。

津守 いきおいよくはじめたのだけど、うまくつづかなかったという経験をしたわけですね。あえていうならば、子どもにしてみると何かそこで気づくことがあるのではないですか。わっとはじめても、こういう時はうまくいかないのだという経験を通して、どういう提案をすればうまくいくかということを考える

ために一つの段階を通ったことで、いくつもうまくいかないことを経験して、その中にうまくいくことも経験していくのではないですか。うまくいく経験だけでは本当にわからないものが、うまくいかなかったときにわかるというそういう経験も必要なのだと考えるのは考えすぎでしょうか。

○ うまくいかない例で、五歳の男の子が四人で野球をしています。子どもたちはテレビなどでみているので、イメージとしてはすごいのあるのだけど、なかなか技術がそこまでいかなかった。ボールを投げてもうつ人のところまでうまくとどかないし、うとうとしてもボールがバットにあたることはほとんどありません。だげどにかく、少しつづけていました。ちょうどその時、別の遊びをしていた子がころがってきたボールを急にワッと投げとばしました。野球をしていた子は不満そうに、妨害されたような顔をしてワッと叫びましたがとたんに「いちやめた」とサッと野球が解体してしまいました。子ども自身も何となくうまくいわずに、でもやめるところまでふみきることができなかったのが、ちょっとした契機でくずれてしまうわけです。イメージだけあっても技術がともなわないと、その遊びが発展しないという感じました。

津守 さっきの例の中にも、先生のところにもって行って確認してもらおうというのがありました。もしそこに先生がいれば、

向く方向がみつかると思いますね。

○ ええ

津守 だけど、そうやって先生がいて伸びる経験も必要だし、うまくいかない経験も必要なのでしょうね。

○子どもの活動を尊重して

T 四歳の女児A子が、砂場で、池をつくっている同クラスの男の子二人、女の子二人のグループのところいき、何の抵抗もなく一緒に泥水の中から泥をすくいあげはじめます。

B子はジョーロ二つで水をくんで池に「雨、雨、雨の音よ、こわいわねー。もつと雨ふらせるわよ」といいながら入っています。泥をすくっている男の子が、「A子ちゃん、ここに入ってごらんよ」というと、A子は泥水の中にくつごと片足を入れます。両手を深く入れ、男の子二人に「手入れてごらんさい。すごく深いわよ」というと男の子は二人とも、中に入れ、顔を見あわせてニコッとします。A子はまたくつを泥水の中に入れるのです。今度は前よりも深く入れ、満足そうな顔をして、男の子の方をみて何かいいます。B子はこの池遊びを最初からしているようで、エブロンは水と泥でベチャベチャ、時々エブロンをつまんでみてはまた、活動をつづけています。

A子もB子もよれなど全然気にしないで、自分の気持ちと

活動とが一緒なのです。A子は「私の足みてよ、どろどろよ」と皆にみせていますし、B子はよごれたエプロンをつまみながら、「エプロンぬいでこよー、これどうしてくれる。このエプロンまっくろけー」といいますが、何か充分に活動したあとの満足感というのでしょうか、実に楽しそうなのです。

B子が堀合先生のところにいきましたので、先生はどうなさるかとお興味深く思い、私はB子を追ったのです。先生は「お手手洗ってらっしゃい。それから取ってあげましょうね」B子は手を洗いにいき、手先きだけ洗ってすぐもどってきます。先生はエプロンをとってあげながら「あそこでかわかしておきましょう。お帰りまでにはきつとかわくでしょう。もう一度洗いねいに洗ってらっしゃい」といいます。

津守 子どもの活動が中心になって、それを伸ばそうという指導法ですね。

T ええ、先ほどOさんの例の中の「お母さんにしかられるから」と自分のしたいこともしなかった子に比べますと、いきいきと活動していると思いましたがし、子どもの活動を大切にして

いる先生の配慮が陰にあるのだなというのを思いました。

津守 今日、いろいろの活動の例をお話いただきましたが、皆さんの見られた例を全部つくさないうちに、時間がなくなってしまう。わずか一、二時間見ただけで、幼児の活動の

中にはほんとうに数多くの貴重な経験があり、その中で幼児が成長している姿をみる事ができたように思います。きょうお話に出たのは、私どもの目にふれたごくわずかの部分にすぎないのでありまして、そう思うと、幼稚園の生活の豊かさに驚かされます。ちよつとみると、遊んでいるだけのよう

うにみえるところに教育的な経験があるのです。

きょうは皆さんごくろうさまでした。

幼児の教育 第六十六巻 第六号

六月号 © 定価八〇円

昭和四十二年五月二十五日印刷
昭和四十二年六月 一 日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

幼児のための 紙芝居です



●'67年度幼児テキスト紙芝居全集第3回配本中

たのしい生活シリーズ

ぴんきーは歯がいたい

¥420 画・森国トキヒコ

ゆたかな心シリーズ

みんなでわけっこ

¥420 画・石川雅也

名作12集

はなたれ小僧さま

¥420 画・西原ひろし

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17〔振替東京〕株式会社 教育重劇
TEL(341)3400・3227・1458〔29855〕

フ レーベル館の保育図書

・新刊・

幼児の心理と教育

東京女子大学助教授 藤永 保著

従来の幼児心理学の諸説をわかりやすく解説
検討し、発達心理学の立場から説いた独自の
幼児教育論「保育の手帖」に二年間連載さ
れ、好評だった保育講座を一冊にしたもの。

目次(一部) 幼児観と発達心理学・人間の
乳児期・発達の様相・性格の形成・道徳教
育について・社会性の発達・情操教育につ
いて・知的教育について・ことばのはたら
き・言語教育のプログラム・数概念の発達
・数教育のプログラム

A5判 六〇〇円

ホワイトボードスケッチは、その名のとおり、新しいスケッチ用ボードです。特殊な、速乾性のインキをつかって書いたり消したり、1枚のボードを何回でもご使用いただける———というもの。絵の練習や字の練習、などにとっても便利です。紙のムダもありません。マーカーインキも楽しい6つの色を用意いたしました。お子さまにも軽く、スマートなセットです。

■ 5つの特長 ■

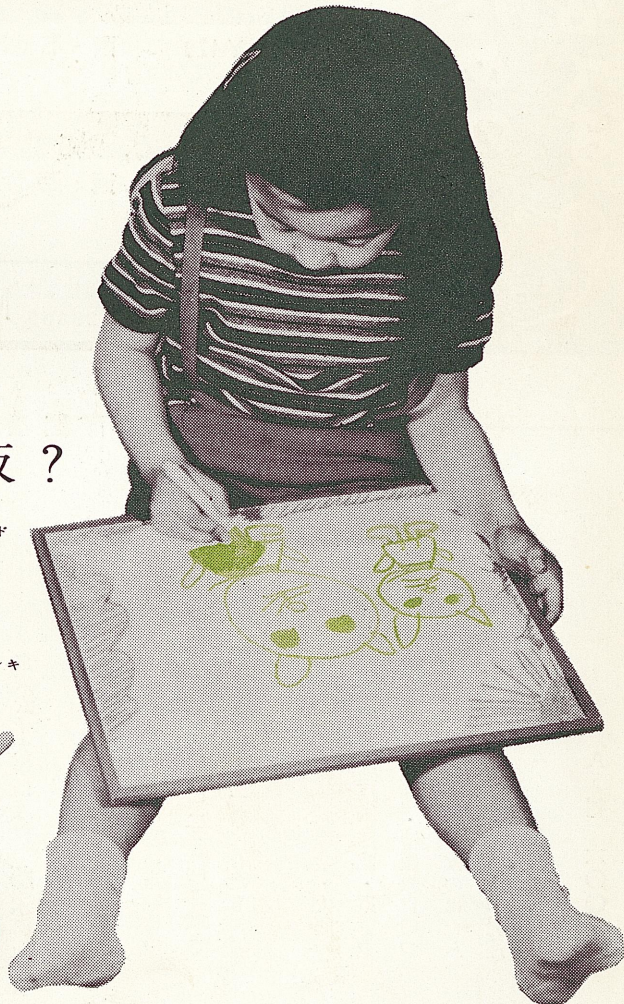
- 1 黒、赤、青、緑、黄、茶。6色の美しい色で書けます。
- 2 イレージャーで軽くふくだけできれいに消せます。
- 3 マーカーインキは書くとサッと乾く性質ですから、書いたあとすぐ消せ、消したあとすぐ書けます。
- 4 チョークのように粉がとびません。
- 5 携帯に便利です。サイズは、標準型で(30cm×45cm)です。園用としての大型も各種あります。■お求めは、フレーベル館どうぞ。

魔法の画板？

● ボード

● マーカーインキ

● イレージャー



<新発売>

フレーベル館 ホワイトボード スケッチ